

引用・参考文献

- 石川美咲 2016a「柴島城」中井均監修・城郭談話会編『図解 近畿の城郭』Ⅲ、戎光祥出版
- 石川美咲 2016b「天王寺城」中井均監修・城郭談話会編『図解 近畿の城郭』Ⅲ、戎光祥出版
- 市川 創 2014「四天王寺周辺の堀状遺構」『関西近世考古学研究』22、関西近世考古学研究会
- 井上宗和編 1960『日本城郭全集』第6巻近畿編、日本城郭協会
- 遠藤啓輔 2017「我孫子環濠」中井均監修・城郭談話会編『図解近畿の城郭』Ⅳ、戎光祥出版
- 遠藤啓輔 2018a「遠里小野環濠」中井均監修・城郭談話会編『図解近畿の城郭』Ⅴ、戎光祥出版
- 遠藤啓輔 2018b「桑津環濠」中井均監修・城郭談話会編『図解近畿の城郭』Ⅴ、戎光祥出版
- 遠藤啓輔 2018c「喜連環濠」中井均監修・城郭談話会編『図解近畿の城郭』Ⅴ、戎光祥出版
- 大阪経済大学 2002『東淀川の歴史と美術』
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2003「榎並城跡伝承地発掘調査（EN01-5）報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 平成13年度』
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2008「野田城跡伝承地発掘調査（N007-2）報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 平成19年度』
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所 2014「野田城跡伝承地（N012-2）報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書 平成24年度』
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所 2018a「三津屋城跡伝承地発掘調査（MT15-1）報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2016）』
- 大阪市教育委員会・大阪文化財研究所 2018b「海老江1丁目所在遺跡発掘調査（EE16-1）報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2016）』
- 大阪市教育委員会・大阪市文化財協会 2023「野田城跡伝承地発掘調査（N021-1）報告書」『大阪市内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書（2021）』
- 大阪市文化財協会 1983『瓜破遺跡』
- 大阪市文化財協会 1998『桑津遺跡発掘調査報告』
- 大阪市文化財協会 1999『長原遺跡発掘調査報告』Ⅶ
- 大阪市文化財協会 2002a『大坂城跡』Ⅶ
- 大阪市文化財協会 2002b『大阪市埋蔵文化財発掘調査報告—1999・2000年度—』
- 大阪市文化財協会 2006『長原遺跡発掘調査報告』ⅩⅤ
- 大阪市文化財協会 2023『大阪中心部における5～17世紀の治水・水防遺構と都市形成過程の研究』
- 大阪府教育委員会 2022『摂津における中世城館の調査』
- 大阪文化財研究所 2011『瓜破遺跡発掘調査報告』Ⅷ
- 大阪文化財研究所 2012『大阪市平野区平野環濠都市遺跡発掘調査報告』
- 大阪府西成郡今宮町 1926『今宮町志』
- 大澤研一 2017「中世大阪の古道を求めて」栄原永遠男編『館長と学ぼう新しい大阪の歴史』Ⅰ、

東方出版

大澤研一 2019『戦国・織豊期大坂の都市史的研究』思文閣出版

大澤研一 2023「中世木津考」『大阪歴史博物館研究紀要』第21号

大庭重信 2017「淀川河口域の耕地開発－福島区海老江遺跡の調査から－」『葦火』185号、大阪文化財研究所

大山崎町歴史資料館 2016、第24回企画展図録『堺と大山崎－自治都市の系譜－』

岡倉光男 1973「幻の野田城－その由来と戦略」『野田新報』第7号

岡本 健 2023a「大阪市内の中世城館－柴島城と堀城－」『葦火』第38巻1号、大阪市文化財協会

岡本 健 2023b「地形環境から見た中世大阪の城館」『講演会 中世大阪の沿海開発と村・城館』発表資料、大阪市文化財協会・大阪歴史博物館

金田啓吾 2005「大和田城考」『まんだ』85号、まんだ編集部

櫻井久之 2008「福島区野田城跡伝承地 初の本格調査」『葦火』135号、大阪市文化財協会

櫻田小百合 2023「淀川河口低地の水防・水利と耕地開発－中・近世の南中島地域－」『大阪市文化財協会研究紀要』第24号

清水靖夫編 1995『明治前期・昭和前期 大阪都市地図』柏書房

白川俊義編 2022『謎解き喜連村史第1巻 大阪歴史博物館「大阪町めぐり喜連」特別企画展の記録と喜連村史研究・活動の概要』喜連村史の会

中井均監修・城郭談話会編 2014～2018『図解 近畿の城郭』Ⅰ～Ⅴ、戎光祥出版

田代克己・渡辺武・石田善人編 1981『日本城郭体系』第12巻 大阪・兵庫、新人物往来社

仲田馬治郎・日浦弘明編 1982『桑津郷土史』桑津郷土史研究会

中西裕樹 2015『大阪府中世城館事典』戎光祥出版

中西裕樹 2017「元和三年公役普請（築城）の高槻城の評価－城郭の機能・性格・構造から－」『天下泰平と高槻城』高槻市教育委員会・高槻市立しろあと歴史館

中村博司 2007「東摂城址図誌 解題・影印」中村博司編『よみがえる茨木城』清文堂

西近畿文化財研究所 2006『伶人町遺跡発掘調査概要報告書』

平野区誌編集委員会 2005『平野区誌』

平野区誌拾遺集編集委員会 2011『平野区誌拾遺集』

平野郷公益会 1931『平野郷町誌』

平山裕之 2020「上本町遺跡で発見された巨大な堀」『葦火』196号、大阪市文化財協会

藤 三郎 2012「野田城と戦国三好一族」『なにわ福島ものがたり』福島区歴史研究会

藤田 実 1983「明治期地籍図にみる桑津環濠集落址」『大阪の歴史』9、大阪市史編纂所

平凡社地方資料センター 1986『日本歴史地名大系 28 大阪府の地名』

本城正徳 1979「史料紹介「戦国末期から近世初期の平野郷関係史料について」」『待兼山論叢』第13号

前田豊邦 1989「地籍図からみた大阪市域北部の城郭址について」『大阪市文化財年報』昭和62年

引用・参考文献

- 度（第3号）、大阪市教育委員会文化財保護課
- 豆谷浩之 1999「平野環濠都市遺跡における地割の転換をめぐって」『大阪市文化財協会研究紀要』第2号
- 南 秀雄 2022「発掘からみた中世大阪の沿海開発―難波砂堆」『大阪市文化財協会研究紀要』第23号
- 三原大史 2021『「明応二年御陣図」からみた中世後期の河内国』『都市文化研究』23、大阪市立大学大学院文学研究科 都市文化研究センター
- 大和郡山市教育委員会 2000『若槻環濠第1次発掘調査報告書』
- 李 陽浩 2002「榎並城跡伝承地が伝承地でなくなる日？」『葦火』第17巻3号、大阪市文化財協会
- 脇田修 1972「戦国末期、平野郷郷民の連判状」『日本史研究』第127号
- 渡辺武 1977『野田城』大阪福島ライオンズクラブ
- 渡辺武 1995「幻の野田城を探る」『大阪春秋』第24巻3号、大阪春秋社
- ※試掘調査については調査日誌を参考にしたため、引用・参考文献として提示していない。

第四章 文献史料集成

凡例

一、本章では、大阪市の中世城館に関連する史料のうち、本共同研究で参考としたものを中心に掲載した。

一、史料の配列は、第二章での城館の順番に合わせている。

一、〇囲みの番号は、第二章における城館の番号に対応している。

一、第二章における史料引用は、本章における資料番号を示すことによっておこなう。 例：①—1

一、史料の年代については、同時代史料は作成年代を、軍記史料は題材とした戦闘の年代を、近世・近代の刊行物については刊行年を基準とした。

一、史料中で引用を省略した箇所は、「……」で示した。

一、史料の中には、賤称・蔑称などのいわゆる差別用語とされる語が出てくるが、これは当時の状況を正しく認識するためであり、差別を容認するものではない。

一、本章は谷口正樹と大澤研一が担当し、谷口が編集した。

一、史料の掲載にあたっては、以下の活字本に依拠した。

【文書、古記録】

『大乘院寺社雑事記』 辻善之助編『大乘院寺社雑事記』第七巻、三教書院、

一九三三、同第八巻、一九三四、同第十巻、一九三五

『尋憲記』 東京大学史料編纂所編『大日本史料 第十編之四』東京大学出版会、

一九三四

『多聞院日記』 辻善之助編『多聞院日記』第二巻、三教書院、一九三五

『園太暦』岩橋小弥太・村田正志・永島福太郎校訂『園太暦 巻四』太洋社、一九四〇

『言継卿記』 山科言継著、太田藤四郎編『言継卿記』一—四巻、太平洋社、一九四一

「二五八四年一月二十日附、長崎発、パードレ・ルイス・フロイスより印度地方長パードレ・アレッサンドロ・バリニヤニに贈りし書翰」村上直次郎『耶蘇会の日本年報』第一輯、拓文堂、一九四三

『御撰大坂記』 大阪市立中央図書館市史編集室編『大阪編年史』第三巻、大阪市立中央図書館、一九六七

「米良文書」 永島福太郎・小田基彦校訂『史料纂集（古文書編）① 熊野那智大社文書 第一』続群書類従完成会、一九七一

『兼見卿記』 斎木一馬・染谷光広校訂『史料纂集 兼見卿記 第一』続群書類従完成会、一九七一、斎木一馬・染谷光広校訂『史料纂集 兼見卿記 第二』続群書類従完成会、一九七六

『今井文書』『堺市史 続編 第五巻』堺市役所、一九七四

「木本勝太郎氏所蔵文書」『富山県史 史料編2』富山県、一九七五

『蔭涼軒日録』竹内理三編『増補續史料大成 第二十五巻 蔭涼軒日録五』臨川書店、一九七八

『御手許文書』『山内家史料 第二代忠義公記 第一編』山内神社宝物資料館、一九八〇

「離宮八幡宮文書」 大山崎町史編纂委員会編『大山崎町史 史料編』大山崎町、一九八一

「真継文書」 名古屋大学文学部国史研究室編『中世鑄物師史料』法政大学出

版局、一九八二

『信長文書』 奥野高広著『増訂織田信長文書の研究』吉川弘文館、一九八八

『宗及他会記』 永島福太郎編『天王寺屋会記』一 他会記上』淡交社、

一九八九、同編『天王寺屋会記』二 他会記下』淡交社、一九八九

『再昌草』 伊藤敬・荒木尚・稲田利徳他編『新日本古典文学大系』四七 中

世和歌集 室町篇』岩波書店、一九九〇

『佐古文書』 杉森玲子「平野の町割と元禄七年「平野大絵図」」『平成十一』

十三年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書（課題番号

一一四一〇〇八八）末吉家史料の目録作成と公開および同家史料の総合的

研究 研究代表者佐藤孝之』

『末吉文書』 杉森玲子「近世初期の平野庄―年寄・庄屋の動向を中心に―」『平

成十一』十三年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書（課

題番号一一四一〇〇八八）末吉家史料の目録作成と公開および同家史料の

総合的研究 研究代表者佐藤孝之』

『楠木合戦注文』 大阪市史編纂所・大阪市史料調査会編『新修大阪市史料

編 第3巻 中世Ⅱ』大阪市、二〇〇九

『常蓮寺文書』 真宗史料刊行会編『大系真宗史料 文書記録編12 石山合戦』

法蔵館、二〇一〇

『専光寺文書』 真宗史料刊行会編『大系真宗史料 文書記録編12 石山合戦』

法蔵館、二〇一〇

『善勝寺文書』 真宗史料刊行会編『大系真宗史料 文書記録編12 石山合戦』

法蔵館、二〇一〇

『年代記抄節』 真宗史料刊行会編『大系真宗史料 文書記録編12 石山合戦』

法蔵館、二〇一〇

『本願寺文書』 真宗史料刊行会編『大系真宗史料 文書記録編12 石山合戦』

法蔵館、二〇一〇

『毛利家文書』 真宗史料刊行会編『大系真宗史料 文書記録編12 石山合戦』

法蔵館、二〇一〇

『私心記』 真宗史料刊行会編『大系真宗史料 文書記録編10 私心記』法蔵館、

二〇一六

『天文日記』 真宗史料刊行会編『大系真宗史料 文書記録編9 天文日記Ⅱ』

法蔵館、二〇一七

『四天王寺文書』 「NHK大河ドラマ特別展 麒麟がくる」NHK、NHKプ

ロモーション、二〇二〇

『御霊神社文書』 「NHK大河ドラマ特別展 麒麟がくる」NHK、NHKプ

ロモーション、二〇二〇

【史書、軍記】

『織田軍記』 『物語日本史大系 第七巻』早稲田大学出版部、一九二八

『日本書紀』 小島憲之ら校注・訳『新編日本古典文学全集2 日本書紀①』小

学館、一九九四

『細川両家記』 塙保己一編『群書類従 第二十集 合戦部』続群書類従完成会、

一九五九

『万松院殿穴太記』 塙保己一編『群書類従 第二十九集 雑部』続群書類従

完成会、一九五九

『花宮三代記』 塙保己一編『群書類従 第二十六集 雑部』続群書類従完成会、

一九六〇

- 『駿府記』 国書刊行会編『史籍雑纂 第二』続群書類従完成会、一九七四
- 『陰徳太平記』 米原正義校注『陰徳太平記 四』東洋書院、一九八二
- 『重編応仁記』 近藤瓶城編『改定史籍集覧 第三冊 通記類』臨川書店、一九八三
- 『足利季世記』 近藤瓶城編『改定史籍集覧 第十三冊 別記類』臨川書店、一九八四
- 『源平盛衰記』 近藤瓶城編『改定史籍集覧 編外五 参考源平盛衰記(下)』臨川書店、一九八四
- 『縣考輯録』 石田晴男ほか編『綿考輯録 第一卷 藤孝公』出水神社、一九八八
- 『当代記』『史籍雑纂 当代記・駿府記』続群書類従完成会、一九九五
- 『太平記』長谷川端校注・訳『新編日本古典文学全集56 太平記③』小学館、一九九七、同校注・訳『新編日本古典文学全集57 太平記④』小学館、一九九八
- 『信長公記』 太田牛一著、桑田忠親校注『信長公記 新訂』新人物往来社、一九九七
- 【地誌】
- 『撰津名所図会大成』 船越政一郎編『浪速叢書 第七』浪速叢書刊行會、一九二七、同編著『浪速叢書 第八』浪速叢書刊行會、一九二八
- 『全堺詳志 上』 船越政一郎編『浪速叢書 第十三 地誌其二』浪速叢書刊行會、一九二八
- 『日本輿地通志畿内部』 蘆田伊人編『大日本地誌大系 第十八卷 五畿内志・泉州志』雄山閣、一九二九
- 『諸国廢城考』 大類伸編『日本城郭史料集』人物往来社、一九六八
- 『撰津名所図会』 原田幹校訂『撰津名所圖會』上巻・下巻、古典籍刊行會、一九七七
- 『摂陽群談』 蘆田伊人編『大日本地誌大系 第三十八卷 摂陽群談』雄山閣、一九七七
- 【近代以降の刊行物】
- 参謀本部編『日本戦史 大阪役』一八九七
- 大阪府西成郡役所編『西成郡史』大阪府西成郡役所、一九一五
- 井上正雄『大阪府全志』一―五巻、大阪府全志発行所、一九二二
- 大阪府東成郡役所編『東成郡誌』大阪府東成郡役所、一九二二
- 片岡英宗編『中河内郡誌』大阪府中河内郡役所、一九二三
- 鷺洲町史編纂委員会編『鷺洲町史』大阪府西成郡鷺洲町役場、一九二五
- 川端直正編『東淀川区史』東淀川区創設三十周年記念事業委員会、一九五六
- 川端直正編『東住吉区史』東住吉区創設十五周年四ヵ村編入三周年記念事業委員会、一九六一
- 平井聖・村井益男・村田修三編『日本城郭大系 第十二巻 大阪・兵庫』新人物往来社、一九八一
- 『角川日本地名大辞典』編纂委員会・竹内理三編『角川日本地名大辞典 二七 大阪府』角川書店、一九八三
- 平凡社地方資料センター編『日本歴史地名体系 第二十八巻 大阪府の地名』I・II、平凡社、一九八六

① 江口城

1 天文十八年（一五四九） 細川両家記

同六月十七日に宗三、諸勢催して三宅より中嶋の江口へ陣取也。三好方はを見て、愚人夏の虫、飛んで火に入と云う古人の言是也。先ず三宅に江口の間の通路をとめよとて、とて、十河民部大輔方、安宅方、淡州衆、別府の川がたに陣取給え、通路留る也。河内方衆、三好方衆、江口へ一度に取懸られければ、同廿四日に一戦にも及ばず日中に江口より逃出ければ、出合々々に討程に、……八百人討死と申候也。……此分に成行上は榎並城に籠る衆、右衛門大夫、河原林対馬守、方々へ落られたり。

2 天文十八年（一五四九） 足利季世記 四 宗三出張の事

六月十一日ノ早天ニ、宗三八榎並城ヲ立出、晴元ノ御馬廻衆相催シ、三千余騎江口ノ渡リヲコヘテ中島ノ城ニ近キ江口ノ里ニ陣ヲトリ、要害ヨケレバ近江勢ヲ待居タリ。三好長慶衆是ヲ見テ、愚人夏ノ虫ト云ハ是ナルベシ、先三宅ノ城ト江口ノ間ノ通路ヲトメヨヤトテ十河民部大輔方ト安宅撰津守方淡州城別府ノ川バタニ陣トリ則通路ヲ留ケル。

3 天文十八年（一五四九） 足利季世記 四 江口城攻落し宗三打死の事

（三宅城攻略中の十河一存は…引用者注）江口ノ城へ押寄ベキト河内勢ヘフレ送り、一味同心シテ淀川ノ東ノ岸ニ打望、江口城ヲ望シニ、流水逆巻、岸ニタタヘ、渡ルベキ様ナカリシニ、四国海賊廿余騎打入一文字ニ渡シ流ヲ切テ向ノキシニ上ル……イマダ一戦ニモ不及江口ノ西ノ木戸口破レ別府ノ手ヨリクヅレケル。又三好長慶三千余騎ヲ引率テサンバツミヲ筋違ニ江口ノ東ノ木戸ニ押寄タリ。……宗三入道ハ川ヲ泳ギ越向ノ岸ニアガラントセシニ河州衆ノ足輕勢ノ中ニテ打取リ首ヲトリケル。……榎並城ニ籠リ

シガ、是ヲ聞テ三好右衛門大夫河原林対馬守方々へ落行ケル。

4 天文十八年（一五四九） 万松院殿穴太記

四方に大河渺々として、沙頭みちせばきに、波うち際迄逆茂木を引かけたれば、容易く敵も寄せ難し。又打出んも船ならでは叶いがたかりければ、……未だ戦わざるに江口の西の木戸口は毀れけり。別府の手破れしかば、三好筑前守長慶二万余騎を率して、たんばづつみを筋違に江口の東の木戸に押し寄せたり。

5 宝永八年（一七一二） 重編応仁記 十五 江口合戦三好宗三討死の事 付晴元没落の事

大河を一同に押渡り、関の声を揚げれば、未一戦にも不及して、西の木戸を堅めたる別府左衛門が持口より、悉く崩れたり。

6 明和七年（一七七〇） 諸国廢城考

【江口城】 天文十八年六月、三好宗三中嶋城に三好長慶が陣在けるを攻んとて、此城に陣を取る。斯る所に十河民部大輔一存、当城に推寄せ宗三を打取る長慶が宿意を達せんとて三百余騎、淀川の東岸に打臨み、当城を見渡せば、逆巻く水は岸をたたへ、寄来る波は巖を崩す如くなりしかば、敢て寄すべき様なかりしに、四国の海賊に馴れたる者二十余騎、續きてさつと打入り、一文字に流を切つて打渡り、向の岸へ懸上り、具足の水したててぞ立ちにける。一存、あれ討すな者どもとて、三百余騎打入る。馬筏へ水をせかせ安妥と打渡り、死を一举の中に軽くせんと勇み進める勢を見て、尋常の者ならずとや思ひけん、未だ戦はざる前に当城の西の木戸口は崩れにけり。別府の手、破れしかば長慶二万余騎（三好記に三千余騎に作る、未だ孰れが是か知らず、今穴大記に従ふ）を率して、されば堤を筋違に当城の東の木戸に推寄たり。

城中に籠りたる兵二千余騎は皆雄兵鍊騎の勇士なれば、大敵を擒にし戎族を亡す勇みあるべしと見えしに、味方の内に野心の輩有とて、互に心を置合ひて戦ふ者更になし。其上、此四、五日は糧尽て食を止めたれば、心ばかりは勇めども、防ぐに力なくして討る者数を知らず。中にも宗三は河をおよぎて向の岸に上らんとせしを敵兵追近て打取りぬ。

7 寛政一〇年（一七九八） 撰津名所図会

【江口城墟】 江口村の里長田中氏の家その古蹟なりとぞ。『撰津志』云ふ「初め江口村にあり、後、下新庄村に徒す。一名中島の城といふ。初め三好長慶従弟宗三、長慶を細川晴元に讒し、天文十八年宗三ここに拠る。晴元、香西・木沢の二氏を率ゐて三宅の城に入る。宗三を援ふ。長慶の族一存をもつて、三宅の城を落として晴元を擒としたちに本城を攻むる。宗三つひに首を授く。長慶、城を保つ。後に中川氏ここに拠る」

8 大正四年（一九一五） 西成郡史

【江口城墟】 中島村大字江口の里長たりし田中某の旧宅跡、即夫れなりと伝ふれど実地に就て探聞せし所に従へば、城墟は其所よりも尚北に位して小高き所あるの辺ならんと云ふ。

【光照寺】 真宗本願寺派 中島村大字江口にあり、旅栖山と号す。開基は慶空と称し、明応四年本山実如法主の直弟となり、道場を茲に草創す。今の堂宇は文政五年十一月、檀家の協力を以て再建せしものなりとぞ。

【教徳寺】 真宗本願寺派 同村同大字にあり、清涼山と称す。寛文十年四月、本願寺寂如法主の弟子となりし教徳、当寺を創建す。今の堂舎は弘化二年二月、檀那の協力により再建せしものなりと云ふ。

【光明寺】 真宗大谷派 同村同大字にあり、是久山と云ふ。開基宗榮は村農

にして、俗名五郎右衛門と称したり。初俗体にて法要を務めしが、寛文二年本山琢如法主に帰依し、一字を草創せしに起れりと云ふ。

【寂光寺】 日蓮宗 中島村大字江口にあり、寶林山普賢院と号す。当寺は彼の有名な江口の君像を安置せり。其縁起によれば、開基光相比丘尼は平の資盛の女にして、平家衰微の後、乳母なるものゝ郷里、即当江口に住居し、妙の前と称せしとぞ比丘尼は元久二年三月十四日寂すと伝ふれども、爾後のことは詳かならず。境内に歌塚あり、一に君堂と唱へ其名高しとす。

9 大正一一年（一九二二） 大阪府全志 卷之三

江口城の址は西方字宮の城にあり、広さ凡一町九反歩にして、地形恰も行蛇の形を為し、今は耕地となれり。里人之を鑿ち、時に古器を得ることありといふ。

10 昭和三十一年（一九五六） 東淀川区史

城址巖島神社（明治四十二年六月大隅神社へ合祀）の辺がこれにあたるといわれる。（一説に田中氏邸のあと）

② 新庄城

1 大正四年（一九一六） 西成郡史

【大字上新庄】 撰陽群談は本村名を新城に作る。其れは大字下新庄に城墟ありて、昔中川瀬兵衛清秀の出城なりしと云ふに由るべし。而して同所にある今の明教寺は即天正の頃、其城跡に草創せしものなれば、城置山の号あり。又天守址の地字もあるより察すれば、当時新に城を築かれしより之を村名に転用して新城と書きしならんか。

2 大正十一年（一九二二） 大阪府全志 卷之三

【大字下新庄】 旧新庄村は一に新城村とも呼べり、即ち撰陽群談に「車輦は西

成郡新城村にあり、所伝云、昔此処は小栗判官紀州高野山本宮温泉に赴く的車道なり、因て車驟の名あり」と記せる新城村是れにして、新城の称は中川清兵衛の新に出城を築きしより起り、新庄は新城の転ならんか。同出城の所在地たりしを以て、以前は中川清兵衛の城下なりと称し、天守址と呼べる字地ありしと伝ふ。撰津志には「江口城、初在江口村、後徙下新庄村、一名中島城」と記すれども、詳ならず。

【明鏡寺】明鏡寺は字東宅地にあり、城置山と号し、真宗西本願寺にして阿弥陀仏を本尊とす。開基教誓は中川清兵衛の臣金田刑部太夫なり、初め天台宗に入りしも、後本願寺蓮如法主の教化を受けて其の直弟となり、自己の所有地に当寺を創立し、其の地は中川清兵衛の城址なるを以て、城置山の山号を附せしといふ。宝永四年十月二十七日類焼に罹りて焼失し、明和五年三月之を再建せり。

【覚林寺】覚林寺は字中宅にあり、清涼山と号し、真宗西本願寺末にして阿弥陀仏を本尊とす。創立の年月詳ならず。宝永七年八月三日本山より寺号を授けられ、……

③ 柴島城

1 天文十八年（一五四九）二月十八日 細川両家記

同十八日に筑前守境へ越られ、同十九日に遊佐方と参会有、中嶋城榎並城を責られべき談合有、打帰られて同廿六日に尼崎迄出陣有、同河内勢は欠郡十七箇所へ陣取也、淡路勢悉く上られたり、

同三月一日に三好方衆中嶋へ入也、然に柴嶋城に典厩衆・宗三衆籠て有、城の西方浜にて出合候て合戦有、

2 天文十八年（一五四九）二月十八日 足利季世記 四 濱方合戦の事

二月十八日、三好長慶ハ堺へ打チ越ス、同十九日ニ遊佐河内守長教馳来テ軍評定アリ、中嶋城榎並城責落スヘキ僉議アリテ引返ス、同廿六日ニ尼崎マテ出陣アリ、同時河内衆・畠山衆・遊佐衆欠郡十七箇所ニ陣取ケル、淡州衆モ悉ク馳上ル、細川右京大輔晴元ハ細川右馬頭晴堅ノ館中嶋城ニ籠ラル、同三月一日三好長慶衆中島エ発向ス、柴島城ニ典厩衆・宗三衆籠リケレハ、城ノ西方浜ニ出合、散々防ギ戦ヒシカ、

3 享保二〇年（一七三五）撰津志

【柴島壘】始十河一政、終稲葉氏、又有郡境、

4 大正四年（一九一六）西成郡史

【城址】村内に城址あり、土地凡三尺許も高く、西成郡第一高等小学校舎のある処、即夫れなりと云ふ。今地字にも本丸・城道の名遺り、元和の頃は稲葉淡路守（記述と称す、後丹後福知山城主とな、慶安元年八月二十日城内に自刃す）、此城に居りて、本郡江口村・太道村辺を領せしかば、本村の如きも亦素より其封内に在りしならん。

5 昭和六十一年（一九八六）大阪府の地名

【柴島城跡】柴島にあった城。かつて、柴島の地域には本丸・堀・屋敷などの字名が残っており、その付近が城跡と推定されてきた。しかし、明治時代の新淀川の開削工事などで地形の変化が著しいため、規模などを復原することはできない。

④ 堀城

1 天文十八年（一五四九）二月十八日 細川両家記

③—1を見よ。

2 天文十八年（一五四九）二月十八日 足利季世記 四 濱方合戦の事

③—2を見よ。

3 元龜元年（一五七〇）九月三日 信長公記 卷三 野田福島御陣の事
撰津国中嶋、細川典厩城迄公方様御動座、

4 元龜元年（一五七〇）九月四日 細川両家記

同日晩に御所様京より御下向、然に中嶋の内、堀と申所は典厩藤賢の御城へ御動座也、御所の御勢衆二千計と申候、……同十日に典厩城の前中津川に船橋懸られたり、

5 元龜元年（一五七〇）九月四日 陰徳太平記卷第四十七 信長大坂出張并所々合戦事

九月四日、……同日の晩に至て公方義昭卿御下向有て、中嶋の内、堀と云所、細川右馬の頭藤賢の城へ入御有て、旗本二千許りにて御坐す、

6 元龜三年（一五七二）四月十三日 年代記抄節

四月十三日、於中島城、三好為三、香西・三好左京大夫ト申合、細川右京大夫同心可有由申、然其同心無之間、城ヨリ出、ウラヘト申所ニ相城ヲコシラヘ、中島城ト相戦、

7 元龜三年（一五七二）十二月二十日 年代記抄節

十二月廿日比、三好・松永・大坂衆、中島ノ城ヘ寄、責戦フ、

8 元龜四年（一五七三）二月二十五日 年代記抄節

元龜四年二月廿五日、城ヲ出、堺ヘ引入、

9 元龜四年（一五七三）三月七日 織田信長黒印状 『織田信長文書の研究』三六四号）

一、中嶋之儀、去廿七日ニ退城之由さても、おしき事ニ候、公方所為ゆヘニ候、右京兆御心中令察候、……

三月七日

信長（黒印）

10 天正二年（一五七四）七月二十三日 織田信長黒印状 『織田信長文書の研究』四五九号）

折帛披閱候、去廿日至中嶋相動、即及一戦切崩、数多討捕之、残党河へ追込、悉放火之由、手強ニ被申付故、武勇之子細候、……

七月廿三日

信長（黒印）

荒木信濃守殿

11 天正四年（一五七六）五月十九日 下間頼廉書状（常蓮寺文書）

将又一昨十九夜、中島堀城を忍取候処、中川瀬兵衛無念かり、昨日早旦より及晩まで、種々雖及行候、此方人数入置、一段堅固ニ候、又去夜瀬兵衛被詰、及一戦、是又此方得大利候、可心安候、堀城無類之取出ニ候条、味方中之大慶此事候、……

刑法

五月廿一日

頼廉（花押）

12 天正六年（一五七八）九月二十四日 顕如書状（善勝寺文書）

信長昨日廿三京上由候、彼分国へ陣ふれハ、廿七日此表へ可有着陣由候、中嶋表敵之城々へハ十日已前より信長手廻之衆を入置、難波之嶋ニ要害を相構、大船を可入置由候、……

九月廿四日

顕如（花押）

紀州惣門徒中へ

13 天正六年（一五七八）十一月八日 下間頼廉書状（毛利家文書 八三二）

諸警固一昨日六日至木津浦御着岸候、当寺大慶此事候、仍撰州表之儀、先書申入候キ、定而可相違候、自荒撰、為証人息女并父子血判之誓詞被差越置候、即中島表付城共破却候、……

十一月八日

頼廉

下刑法

宇泉

御宿所

頼廉

14 天正六年（一五七八）十二月十一日 信長公記 卷二 丹波国波多野館
取り巻くの事

十二月十一日、所々に付城仰せ出だされ、信長公、古池田に至つて御陣を移さる。

御取手御在番衆……

一、毛馬村 織田上野守、滝川左近、北畠信雄卿、武藤惣右衛門。……

一、中島 中川瀬兵衛。……

一、大矢田 安部二右衛門。……

15 大正四年（一九一六）西成郡史

【堀城墟】神津村大字堀にあり。永禄九年、細川右馬頭藤賢の築くところなり。

藤賢は松永久秀に属して此城に楯籠りしが、阿波国篠原衆の為に攻められ危機に迫りしとき、石山門跡の仲裁に由りて和議成り、八月十四日城を明けて退けり。元亀元年織田信長摂津に打て出で、三好退治の折から將軍義昭も此城に入れりと伝ふ。

【大字堀】康安元年の昔、太平記に「中津川の橋爪（やづ）にて、白江源次六騎踏み止りて討死しける。是ぞ案内者なれば、足立の善悪をも辨へて、一軍もせんずると、佐々木がかねてより憑みける国人の中、白一揆五百余騎一戦も戦はず、物具太刀刀を取り捨て、河中へ皆飛び漬る。始はさしも義勢しつる吉田肥前、真先に橋を渡りて逃げ、続く敵を渡さじとやしたりけん、橋板一間引

落してければ、跡に渡る御方の兵三百余騎は、皆水に溺れてぞ流れける。佐々木判官兄弟は、橋の辺まで落ち延びたりけるが、縣次郎が橋の落ちて候ふぞ、とても叶はぬ所なり、返して討死せさせ給へ、御供申さんといひけるに耻しめられて、兄弟二騎引き返して矢庭に討れてけり」と見えたる。而も其古戦場は恰も川の南岸は成小路村辺、北岸は本村に当るに似たり。後永禄の頃細川右馬頭藤賢、爰に城を築き楯籠りし処なること諸国廢城考に見えたり。城墟今詳かならずと雖も、現今本大字と今里と相接する所の堤防に傍うて、自然の丘阜を形くる一郭あり、是なん或は其址なるやも知るべからず。且想ふに、堀の称も此城の成りし際、濠を鑿ちしより起りしにはあらざるか。字に堀ノ内あり。中島大水道の古記録に拠れば、此辺の北に上拾参箇村の悪水排除に用ゐられし其古水道址ありしこと明かにして、後又之を同水道の一部に利用せしことも亦確かなり。是等の事実を参取して按ずるに、其古水道は城濠址と見るも亦甚だ誤りなかるべし。

⑤ 三津屋城

1 元禄十四年（一七〇一）摂陽群談 卷第九

【中島古城】西成郡三津屋村光専寺境内にあり。三好宗三在城。天文十八年六月廿四日、為同姓長慶戦死す。

2 享保二〇年（一七三五）撰津志

【三津屋城】伝云。始于楠氏、終三好氏。

3 大正四年（一九一六）西成郡史

【三津屋城墟】神津村大字三津屋にあり。今光専寺のある処、即夫れなりと伝ふ。初め楠正行之を築き、後三好長慶の掘りし処なりとの説真なるが如し。蓋し正行は此界限に於て屢戦ひしことあればなり。摂陽群談之を以て中島古城と

し、諸国廢城考の記す所亦其地理を同うす。廢城考の記事左の如し。

中島城 細川右馬頭晴賢此に居る。天文十八年三好長慶と宗三入道鉾楯に及びけるが、正月、宗三多田衆を率ゐて池田市庭へ発向して近辺を放火す。長慶則堺へ打越、遊佐河内守長教と当城並に江波城を攻落すべしと評定ありて尼崎に出陣す。河内の畠山遊佐勢欠郡十七ヶ所に陣取せしかば、淡州勢も悉く馳上る。其比細川晴元は偏に宗三を贖肩ありて、右馬頭晴賢が此城に籠られけるが、軍利を失ひて江波城へ引去れば、長慶此城に入替り、敵の寄するをぞ待ける。去程に六月十一日の早天に宗三江波城を打て出、当城に近つき江口の里に陣取ける。此江口と云ふは四方に大河渺々として沙頭路せはき浪打際迄逆木を引かけたれば輒く寄せ難し。又打て出んも舟ならでは叶ひ難かりければ、只いつとなく近江勢を待居けるに、六角定頼の子息左京大夫義賢山城を越て陣を寄すべき由度々注進は有ながら未だ国をも打立たず、難儀の大河をば越懸りぬ。敵は猛勢にて兵糧運漕の道をも取切りたれば宗三は詮方なくぞ見えにける。斯て長慶は当城に於て諸大將を集め評定しけるに十河一存進み出で申けるは、江州の勢着ては味方利を失ふ事もありぬべし。急ぎ晴元のおはする三宅城に取かけ腹切らせ奉り、懸て江口に押寄せ平攻に攻て勝たらんには心地はよかるべきと云ければ、皆此議にぞ同じける。長慶は猶も主君に腹切らせ奉らんも本意なるまじと思けるに、一存は翌日三百余騎にて遂に三宅城にぞ推寄せける。斯りければ一存も譜代の主君に腹切らせ奉らんも本意ならずと思ひ替られしかば、又引返して江口城をぞ攻詰ける。宗三は兎角叶はじと思ひけん、河をおよぎて向岸にあがらんとせしを河内の足輕追懸て打取ければ、晴元も三宅城を出てぞ落行ける。是に由て觀れば、謂ふ所の中島城は確かに此三津屋城に相当するや疑ひあるべからず。又是より先、

文明五年といふに、楠正行の末裔に末広治郎左衛門尉と云ふ者ありて、楠氏の菩提を弔はんため、此地に來りて一寺を創立し之を光專寺と稱すと伝ふ。果して然らば初め三津屋城が正行に由て築れしと云ふの説と相俟つて由縁あるに似たり。而して其城址は今同寺の境内地に當れりといへど其旧蹤を認むべきもの一もある莫なし。

4 大正十一年（一九二二）大阪府全志 卷之三

【光專寺】光專寺は字城の前にあり。三社山と号し、真宗西本願寺末にして阿弥陀仏を本尊とす。文安五年楠正行の末裔なる末弘治郎左衛門尉、本願寺蓮如法主に帰依し、剃髪して正頭と法名し、檀家の協力に依りて当寺を創立せり。故に里俗は末弘光專寺と呼べり。

5 大正十一年（一九二二）大阪府全志 卷之三

【三津屋城址】三津屋城址は光專寺のある所其れなりといふ。今は石壁等の觀るべきものなく、周囲の濠址は井路と變じ、里中の字地に馬洗等の名を存するのみ。城は楠正行の築きし所にして、後三好長慶も之に居りしと。撰陽群談は之を以て中島の古城に擬せるも、従ひ難きが如し。楠正行の築きし所なるを以て末弘治郎左衛門尉は前記の光專寺を創建して、其の祖楠氏の菩提を弔ひしものならん。

6 昭和六十一年（一九八六）大阪府の地名

【三津屋村】……南北朝時代から戦国時代にかけて当地には三津屋城があった。現在の光專寺の地がその跡地という。三津屋城は楠木正行が築城し、天文年間（一五三二〜五五）には細川晴賢が居城したが、同一八年三好長慶が攻め取った。同年、長慶が同城を拠点として江口城（現東淀川区）の三好宗三を攻撃したという。かつて跡地付近には城の前、馬洗の地名があった。

⑥ 大和田城

1 天正六年（一五七八） 信長公記 卷之十一 安部二右衛門御忠節の事

……爰に、大矢田と申し候て、尼崎の並びにこれあり、大坂より、尼崎へも、伊丹へも、通路肝要の所に候。彼の城主は阿部二右衛門と云ふ者なり、芝山源内と兩人申し談じ、御身方の御忠節仕るべきの旨、申し上げ、……爾るところ、二右衛門親・伯父二人、此の由承り候て、大坂門跡並びに荒木に対し、不儀然るべからず。親・伯父は一途同心あるまじきの由候て、二右衛門城の天主へ、兩人取り上げ、居城候。

2 天正六年（一五七八） 十二月十一日 信長公記 卷二 丹波国波多野館取り巻くの事

④—14を見よ。

⑦ 浦江城

1 享祿四年（一五三一） 三月 細川両家記

……十日に境を攻^(惣)べきとて、常植の御勢播磨勢淀川をこし、欠郡中嶋へ陣替し、先陣は住吉のこつ^(勝間)まに陣取を堺より推よせ切勝て、播磨のあしがるに谷・福島を初て八十余人が首討取。堺晴元方は悦也。恒植方は利を失候て、天王寺・今宮・木津・難波に陣取、常植は中嶋の内う^(浦江?)らいに陣取給ふ。浦上は同野田福島に陣取也。

2 元龜元年（一五七〇） 九月 細川両家記

……九月十二日に中嶋の内浦江と申所に古城候。御所様御入場也。此所は先年細川常植御牢人の後……三万騎にて上洛候時、常植此城に御座候也。……

3 元龜三年（一五七二） 四月十三日 年代記抄節

於中嶋城、三好為三、香西・三好左京大夫ト申合、細川右京大夫同心可有由申、

然其同心無之間、城ヨリ出、ウラエヘト申所ニ相城ヲコシラヘ、中嶋城ト相戦、

4 安政二年（一八五五） 撰津名所図会大成

【勝樂寺】北浦江ニあり。撰津志云、大般若經一百三十五跋云承久三年三月廿七日安置撰津国天王寺御領西成郡鷺嶋莊浦江村勝樂寺云々。此寺ハ草創もつとも久遠なりといへども後世廢せり然るを黄檗派の禪宗繁昌の砌再興せしなり。故に今黄檗派の禪宗なり。又一説に長慶山と号することハ三好長慶の菩提寺なりしゆへ斯ハ号くるとぞ。今其事實詳ならず。又此寺の西に城の内と字する地あり。是もいにしへ砦など有し古跡なるべし。

5 大正十一年（一九二二） 大阪府全志 卷之三

【浦江】本地は古来西成郡に属し、南中島の内なり。もと宅美郷にして、大江郷ともいひ、後鷺島莊の名あり。往時は浦江の岸と呼びしが、後浦江村と称す、浦江の名は水辺浦曲の地たるより起れるものならん。西方なる字西里中に三好長慶の城址なりと伝ふる所あり、東西二町拾間・南北五拾間の地にして、今は人家駢列して遺形の認むべきものなきも、細川両家記に「(⑦—1参照、引用者注)」と見ゆるは当所にして、前には常植之に據り、後には義昭之に入り、義昭のときには已に古城たりしを知るべし。

依て思ふに、天文年間三好長慶の三好宗三と兵を構ふるに当り、宗三方の將細川晴賢の籠りて長慶に奪はれたる中島城は当城にはあらざるか、勿論撰津志には、江口城は初め江口村にあり、後下新庄村に從る、一名中島城と記し、撰陽群談には、三津屋村の三津屋城を中島城なりとせるも、江口城の中島城にあらざるは、穴太記等に記せる文面に依りて知られ、下新庄村は單に中川清兵衛の城下たりと伝ふるあるのみにして、又三津屋城も他に中島城なりとの憑據あるにあらざれば、著者の推測と見るの外なし。

されば古老の伝ふる所は、其の據る所なきにしもあらざるが如し。尚後考を俟つになん。

素戔鳴尊神社は字東里中にあり、素戔鳴尊を祀れり。由緒は詳ならず。明治五年村社に列し、同四十一年十二月十二日子里中の無格社八幡神社（応神天皇）・字江川の同野々宮神社（飯豊受皇大神）・字宮の前の同齋宮社（飯豊皇女神）を合祀し、……同四十五年七月二十五日子東殿の無格社和邇社（和邇臣）を合祀せり。合祀せられたる野々宮神社の旧地は拾五坪、齋宮社の旧地は拾六壺にして、撰津志に「野宮神殿、古昔齋宮祓除之地、俱在在浦江村」と記せるものはなり。左に記津守経国の歌も、齋宮祓除の所なりとしての詠ならんか。

字東上殿なる墓所の辺は、明治十四五年の頃本地及び大仁村の共同して大火葬場を設けし所なり。……大正五年三月末日限り廃止せられて、今はなし。

了徳院は字里中にあり。如意山と号し、世俗に浦江の聖天と称す。真言宗護国寺末にして準提觀世音を本尊とす。創立の年月は詳ならず。旧記ありしも往時洪水の為に流失せりといふ。元文元年三月僧宥意高野山の善壽院より入りて再建を企て、同四年十月に至りて竣工し、中興の祖たりしが、其の後に至り復た衰頹せしかば、天保五年僧某の再建せしもの即ち今の堂宇是れなり。

妙壽寺は同字にあり、曹洞宗源昌寺末にして釈迦牟尼仏を本尊とす。延宝三年四月僧存甫の開創にして、天女山と号せしが、後衰頹して諸宗の僧侶来住し、宗派屢変りて一定せざりしも、明治二年二月十五日興巖来りて中興し、称号山と改め、曹洞宗源昌寺末となれり。

勝樂寺は字東里中にあり、長慶山と号し、黄檗宗万福寺末にして釈迦牟尼仏を本尊とす。聖徳太子の創立にして正樂寺と号し、無本寺たりしが、後荒廢せしを三好長慶之を再建せりと伝ふ。延宝六年九月京都嵯峨祥鳳山直指庵獨照の徒弟竹崑来りて再建中興し、同年十月十九日万福寺末となり、正徳四年寺名を勝樂寺と改称せり。

安樂寺は字東の辻にあり、法性山と号し、真宗興正寺末にして阿弥陀如来を本尊とす。往時は字野々宮にありて天台宗たりしも、創立の年月は詳ならず。中興覺性明応元年四月真宗に帰依して、興正寺十六世蓮秀の法弟となり、文亀二年三月参詣者の便を図りて当所に移転し、自費を以て再建せり。

⑧ 野田城

1 享祿四年（一五三一）三月 細川両家記

⑦—1を見よ。

2 享祿四年（一五三一）足利季世記 三 三好筑前堺へ帰事、附天王寺崩高国最後事

高国利ヲ失ヒ、天王寺今宮木津難波ニ陣取リケル。常桓ハ中島之内ウライ江ニ陣ヲ取ル。浦上ハ野田福島ニ陣ヲ取ル。其勢二万余騎ト風聞ス。堺ノ町人ギヤウテンシテ門々ニ垣ヲシタリケレバ、誠ニ御祓ノ日トミヘシ。

3 天文三年（一五三四）六月五日条 私心記

三好伊賀・久介此方へ来り候。野田陣取候。見物ニ行。

4 天文三年（一五三四）七月二十八日 私心記

御斎、野田・福島ヨリ被申候。

5 天文四年（一五三五）七月二十八日 私心記

御斎、野田・福島ヨリ。

6 天文五年（一五三六）七月二十一日 天文日記

中嶋衆八人來候。此内一人野田之者也。然者座敷をたて候。……此中嶋衆ハ此間連々よび候ても不來候て、只今來たる事候。

7 天文五年（一五三六）七月二十五日 天文日記

廿八日斎、善源寺、滓上江、辻、放出、從此四ヶ所如毎年可令勤仕申候て、三貫并白米一石到來候。前々ハ中嶋野田衆も入候へドモ、当年ハ此方申事相背候間、不及是非候。

8 天文五年（一五三六）八月二十一日 天文日記

榎並野田之橋事、従先日滓上江申候へ共、六ヶ所之衆ニ、相届候へバ、從此方かけてたび候へ。

9 天文六年（一五三七）七月二十五日 天文日記

為来廿八日頭料、白米一石、三貫、自辻、放出、澤上江、善源寺來候。中嶋野田加候はず候間、代すくなく候。

10 天文八年（一五三九）七月二十八日 天文日記

斎、如先々野田以下衆勤之。相伴二八人來。

11 元龜元年（一五七〇）八月、九月 信長公記 卷三 野田福島御陣の事

廿六日、御敵楯籠る野田・福島へ成らる。……（細川・三好の…引用者注）八千ばかり野田・福島に楯籠りこれある由に候。……九月十二日、野田・福島島の十町ばかり北に、えび江と申す在所候。公方様・信長公、御一所に詰め陣に御陣を据えさせられ、先陣は、勿論、夜々に土手を築き、其の手々を争ひ、堀際へ詰めよせ、其の数を尽し、城楼を上げ、大鉄炮にて城中へ打ち入れ、責められ候。

……野田・福島種々懇望致し、無事の儀申し扱ひ候と雖も、……野田・福島落去候はば大坂滅亡の儀と存知候歟。

12 元龜元年（一五七〇） 細川両家記

今度攻上るには先々可然處に可楯籠由候處、或人被申けるは、摂州の中嶋の内野田福島と申所候。先西は大海也。淡路四国へ舟通路自由也。北南東方は淀川まきたり。里のまはりは沼田也。是程なる所は稀なるべしと被申たりければ、皆々此儀同心有。……同七月廿七日、右人数摂州中嶋天満森へ陣取也。阿州にて如相定、野田福島に猶以堀をほり、壁を付、櫓を上させ、河浅き所に乱杭逆茂木引、此兩所へ被楯籠也。……然に此處は昔三百八十七年以前に源判官、平家御退治のとき御陣取之處也。是より御船に被召候て、四国西国迄御利運に成由候也。……同（八月…引用者注）十七日に河内古橋と云處に畠山殿衆高屋城より百五十人計、三好左京大夫殿衆若江の城より百五十人計、合三百計楯籠。此由四国衆聞付、野田福島の人数打出、押よせ責入。……八月卅日に三好下野守の舍弟為三入道は信長へ一味して野田より出、御所様へ被参由候也。……一兩日中に野田福島へ押よせ、大攻可有之由風聞候也。……野田福島山衆談合には、譬信長勢五、六万有之共、当城へ一度にはよせがたく、一万々々づつ寄来る共、城戸より外へ出る事なかれ。弱々として日数送るならば東国衆長陣は叶まじか。万一きふに攻来らば木戸口屏際にて鐘突太刀打して運を可開也。……野田福島一途以後は大坂へ可被取懸候由風聞候也。……大坂内談には野田福島この間の分なれば、不苦候へ共、万一不慮出來候へば、則大坂の手前になり候得ば如何なり。兩所堅固の時、只今色立候て可然由にて、同九月十九日夜半に寺内の鐘撞かれ候へば、即人数集けり。信長方仰天也と云。

13 元龜元年（一五七〇）足利季世記 八 三好重蜂起之事

白井入道浄三ト云者進出テ申シケルハ、摂州中島内野田福島ノ地無双ノ勝地ナリ。西ハ大海ナリ。四国淡路エ舟往還ノ通路アリ。南北東ハ淀川ニテ卷タリ。里ノ廻リハ沼田也。寔ニ要害是ニ勝ル所ナシト申ケレバ、……七月廿七日、摂州中島天満ノ森エ陣取。野田福島ニ堀ヲホリ廻シ屏ヲ付矢藏ヲアケ河ノ浅キ所ニハ乱杭逆茂木引テ楯籠ル。

信長ハ天王寺ヨリ中嶋天満ノ森エ陣屋ヲカケラレタリ。……先陣ハ野田ノ北海老江堤田中ニ陣屋ヲカケラレタリ。八日ニ河口ニ向城ノ鍬初アリ。同九日ヨリ野田福島ノ堀ヲ埋草ヲ以テ埋メラル。……一兩日ノ中ニ野田福島ヘ押寄惣責ニスベシト土手芝手ヲツキヨセク攻らる。

14 元龜元年（一五七〇）八月二十八日 言繼卿記

信長ハ天王寺ニ被居、諸勢大坂之西河端悉陣取云々、三好、松永、和田以下越河、天満森陣取云々、敵野田、福島両所ニ籠云々、五六千有之云々、

15 元龜元年（一五七〇）八月二十八日 尋憲記

信長衆中シマヘ越候、三人衆人数中シマ之天満森ニ福シマ、野田ニケ持候カ、信長衆中シマヘ越候砌、天満森と福シマとをははすし候、天満森ニハ左京大夫、山城等陣取由也、福シマニハ信長衆以上將軍方六万余人数也、三人衆一万三千余、是ハ野田ニ取籠由也、路次不通之間、無便宜由候、若便宜候ハ、可申由也、

16 元龜元年（一五七〇）九月四日 尋憲記

陣之様体、中島天満森ニ山城守、高屋衆、和田此衆陣取、信長ハ天王寺、中嶋之野田、福島両所ニ三人衆、天満之森者大坂之戌亥ニ当ル、天王寺ハ大坂之南、中嶋ヘハ渡辺之わたりをして行也、

17 元龜元年（一五七〇）九月十四日 尋憲記

陣之様、海老江ヘ信長陣取、松城者野田之近所一チャウ計チカク陣を寄由也、
18 天正四年（一五七六）四月一日 信長公記卷九 原田備中、御津寺ヘ取手討死の事

荒木摂津守は、尼崎より海上を相働き、大坂の北野田に取手を推並べ、三ツ申しつけ、川手の通路を取り切る。

19 明治三〇年（一八九七）日本戦史 大阪役

野田及福島は南中島の西南端にして、……豊臣の船庫其西南端にあり。新家と称する地、この船庫の北にあり。

⑨ 海老江城

1 元龜元年（一五七〇）九月九日 言繼卿記

一 南方之事、昨日海老江を三好左京大夫・松永山城守取之云々、池田衆取出、伊丹ヘ取懸、伊丹取出、同和田出合、池田ヘ迎入、市場焼云々、織田弾正忠天満森ヘ陣替云々、又大坂之辺相城用意云々、

2 元龜元年（一五七〇）九月十四日 尋憲記

⑧ 11を見よ。

3 元龜元年（一五七〇）九月 信長公記 卷三 野田福島御陣の事

⑧ 1を見よ。

4 元龜元年（一五七〇）九月 細川両家記

同七日に信長天王寺ヨリ中嶋天満森ヘ陣替候也。則天神宮拝殿会所放火申候也。然ば森中ヘ陣屋を懸られ候也。先陣衆は敵近海老江堤田中に陣屋懸られ候也。

5 大正十一年（一九二二）大阪府全志 卷之三

【海老江】 本地は古来西成郡に属し、南中島の内にあり。鷺島荘にして、海老江村と称す。往時は海中にありて海老洲と呼びし所なりと。

八坂神社は字南野にあり。素戔鳴命を祀れり。創建の年月は詳ならず。社頭の小石燈籠に天治又は大治の年号を刻し、邑の旧記に永徳三年霜月二十日鎮守の御社再建云々、文禄三年石川久五郎の検地に除地たりしこと見ゆれば、崇徳天皇以前の旧社なるは明なり。伝へいふ、元亀元年織田信長は三好党を討たんとして、先鋒の将荒木兵庫なる者を遣はし、戦勝を当社に祈りて鞍馬一頭・陣刀一口を奉納せしむ、境内の南隅四坪許なる神馬の跡と呼べるは此の神馬に因み、其の東なる兵庫松といへる丈餘の老松は、当時兵庫の鞍馬を繋ぎし松なりと。信長の奉納せしものなりといへる古刀一口は、神宝として今に伝へらる。……社殿は檜木造檜皮葺にして、寛永年間の建築なり。

南桂寺は字新家東にあり、鷺洲山と号し、三番村真宗定専坊の下寺たりしも、今は東本願寺末にして阿弥陀仏を本尊とする。創立の年月は詳ならず。中興の開基意専は元禄年間の人なり。

6 大正十四年（一九二五） 鷺洲町史

今海老江堤の田の中の陣地の址を求むるに、延宝五年青山大膳亮検地当時の海老江の字地に、川がより古城と称するあり……然れどもその古跡は、今は新淀川の川敷に変じたれば、追懷の史料に若干の寂寞を感じる者、豈独編者のみにあらざるべし

⑩ 福島城

1 享禄四年（一五三一）三月 細川両家記

⑦・①を見よ。

2 天文二十一年（一五五二）八月十一日 私心記

福島へ唐船見物二行、

3 永禄二年（一五五九）六月八日 私心記

富田息女、阿波篠原所へヨメ入也。……福島マデ御送候。屋クラへ行見物候、

4 元亀元年（一五七〇）九月 細川両家記

同九月三日に三好日向守、同息兵庫介も池田より出、福島へ入城由候也。……

同九月十一日に信長方衆福島堤へ被出候。然時城方若輩の衆鉄炮軍仕かけ、信長の武者首七ツ討取て城内へ取入由候也。

5 元亀元年（一五七〇）九月 足利季世記 八 野田福島合戦之事

九月三日二日向守ノ子息三好兵庫助ハ池田ノ城ヲ明ケテ福島へ引入ル。

……

九月十一日信長衆福島堤へ取手鉄炮軍アリ。……

6 享保二〇年（一七三五） 日本輿地通志畿内部分 摂津志

【福島堡】 享禄中三好氏始築。元亀元年重修。慶長之役大野道大等據之。

7 明和七年（一七七〇） 諸国廃城考

福島城 元亀元年七月、三好衆此城を構て楯籠る。是より先六条本國寺合戦に三好衆打負各四國に下り、阿州勝瑞と言所に会合して評定しけるは、去年正月掛川の合戦には打勝といへども、洛中近所に立よるべき要害なくして敗軍する事無念なり。今年は然るべき城郭を構へ兵糧を入置て攻上り籠城すべしとて、当國中嶋天満森へ陣取り野田福島に堀をほり廻し屏を付、矢倉を上げ、川の浅き所には乱杭逆木引て楯籠る。織田信長此由を聞て美濃尾張三河遠江勢を催し、其勢三万余人天王寺に陣取られけるが、其より又中嶋天満森へ陣替有り、河口に向城を築き、野田福島の城を埋草を以て悉く埋らる。一両

日の中に此城へ推寄惣攻にすべしと言ひ、芝手を築寄せ攻ければ城中堪へ難くぞ見へける。斯る所に越前の朝倉と浅井備前守其隙を伺ひ、都を攻取らんと大軍を催し比叡辻八王子に陣取る由聞ければ、信長此城を攻落したりとも都を一日も取られ王城に煙を拵させては、信長が恥辱なりとて爰をば先卷ふくし帰陣しける。

8 明治三〇年（一八九七） 日本戦史 大阪役

大野道大、棚楼を福島の五分一に設け、八百人をもつて新家を守り、川に沿ひ柵三重を樹て、大安宅丸以下大船数艘、及び盲船などを設け、新家伝法口などに浮かべ、また福島に砦を設け、……これを守る。

⑪ 木津城

1 鎌倉時代 源平盛衰記 巻四七

今宮ノ前木津ト云所ヨリ海人ヲ語ヒテ……此難波沖ニ……船ニ乗奉テ、遥ノ沖ニ漕出ス

2 天正四年（一五七六） 四月十四日 信長公記 巻九 原田備中、御津寺へ

取手討死の事

御敵ろうの岸・木津両所を拘へ、難波口より海上通路仕候、木津を取り候へば御敵の通路一切止候間、彼在所を取り候へと仰出ださる。……五月三日、早朝、先は三好笑岩、根来・和泉衆。二段は原田備中、大和・山城衆同心致し、彼の木津へ取り寄せ候のところ、大坂ろうの岸より罷り出て、一万計にて推しつゝみ、……

3 天正四年（一五七六） 四月十五日 専光寺文書

今度至木津在城、殊被尽粉骨、一昨日十三日、於今宮表被及一戦、一番鏖、両度分捕已下、高名無比類儀候、

4 天正四年（一五七六） 五月三日 年代記抄節

大坂ノ西木津ヲ責ルトテ、原田備中守打死ス、

5 天正四年（一五七六） 五月八日 言繼卿記

自南方右大將注進度々有之、大坂西木津之城敗北云々、一騎^騎一万計討捨云々、尤大慶々々、尚々大坂之城可被攻也、

6 天正四年（一五七六） 七月十五日 信長公記 巻九 西国より大船を催し

木津浦の船軍歴々討死の事

中国安芸の内、能嶋・来島・児玉大夫・栗屋大夫・浦兵部と申す者、七八百艘大船を催し、上乘して大坂表海上へ乗出し、兵粮入るべき行候、……是等も三百余艘乗出し、木津川口を相防ぎ候、御敵は大船八百艘ばかりなり、懸け相戦ひ候、陸は大坂ろうの岸、木津、えつ田が城より一揆ども競ひ出で、住吉後手の城へ足輕を懸け、天王寺より、佐久間右衛門、人数を出だし、横手に懸け合ひ、推しつをされつ、数刻の戦ひなり、

7 慶長十九年（一六一四） 十一月二十日 御撰大坂記

政宗家来山岡志摩、権現様御前江被召出、政宗義木津・今宮迄可構陣旨被仰出候、台徳院様茂御同意二而、政宗木津江陣取仕候、

8 (慶長十九年) 十一月二十二日

御手許文書

一書致啓上候、きつか城貴様鍋島信濃守殿御普請可被仰付之旨被仰出候、只今きつへ可参候間、くいなわ御下奉行衆大工一人并大鐘被仰付御出し可被成候、恐惶謹言、

佐久間河内守

十一月廿二日

正休（花押）

山代宮内少

松平土佐守様

忠之（花押）

人人御中

9 大正四年（一九一六） 西成郡史

天正年間本願寺門徒、織田信長の軍と戦ふや、木津川口の海運を防衛するため此地に城塞を築きたりと云ふ。但し其址今詳かならず。又慶長十九年大坂冬の陣の際にも、攻守共に其要害地として重視せられしが如く何れの時も其争鋒の地なりき

10 大正十一年（一九二二） 大阪府全志 卷之三

【木津砦の址】木津砦の址は、西北に当れる十三軒川に沿へる出城といへる字地其れならんといふ。砦は石山本願寺の織田信長と戦へるに際し、木津川に依りて会場との聯絡を取らんがために設けられしものなり。……願泉寺旧記中に当砦に関するものあり、「信長の本願寺と出入の節は、敵勢を紀州鷲の森の御堂へ推寄せまうさぬ様、木津総門葉老若男女は各我家を棄て、西海の浜に四方八町の埒を結び、門戸厳しく小屋建て籠居す、高櫓の石垣は飛田墓所の五輪石塔を夜中に引取りて石垣とす、昼は男子は田地に出て耕作す、其の時は刀或は鎗を持って用心す、夜は女子番を勤む、月の夜は竹の末を切りとぎりて水にひたし、立かけて城内を守るに、月の光に映じて鎗と見ゆ、夜戦に其の竹にて寄手のもの数多を殺す、其の他落穴を以て数百名を殺す、寄手は天王寺・茶臼山に陣を取り、出で、戦ふなり、或る夜忍びのものの木津城に入り来る、其の時大將定龍之を知りて夜半の鐘を明け七つ寅刻に撞きしにより、忍びのものとつかへる、此の鐘寺へ持帰りたるに、寛永年中火災の時早鐘に依りてわれ損んず、件の城跡今は畑となれり、字して出城といふ」と。是れ

に依れば当砦は木津総門徒等の設けしものなるかの如くに見ゆ、史家参考の資たらん。其の地よりは今も墓石を出すことありといへば、記中に見ゆるが如く飛田墓地等より運び来りて石垣に利用せしものならん。

⑫ 荒生城

1 大正一二年（一九二二） 東成郡誌

【古城址】大字荒生の東方に古城址ありと伝ふ。又字城東の名遺れり。何城にて何氏の拠りし所なるか詳ならず。天文十年、石山軍の時、榎並莊（城北古市清水榎並野江一帯の地）の稲田を刈りて軍糧として本願寺に献じたるにより、今に至るまで毎年榎並十四日講へ供物を贈り来る。供物は栗大の赤き餅にして、総数約六百個あり、之を榎並内の本派本願寺派の檀家全部に分配す。

⑬ 毛馬城

1 元龜元年（一五七〇） 九月 陰徳太平記 卷第四十七 信長被攻本願寺事

鈴木伊賀守は（信長方が…引用者注）重ては必定天王寺・森口よりそ寄んずらん、其用意候へしと申ければ、さらば天王寺に出城を構へしとて、其支度有ける所に、秋野を始め一舎二舎の者共、種々佗言しける故、五町許り相去て、勝曼の塔に城を築き、軍兵多く入置。其外木津・難波の森・玉造・伝法・大海・飯満・鳴野・久方寺・出江・小濱・佃・尼崎・花隈等に大将を配りこめ、樓の岸・本庄へも人数をかさみ、手堅く持堅めたり。

2 天正六年（一五七八） 十二月十一日 信長公記 卷二 丹波国波多野館

取り巻くの事

④—14を見よ。

⑭ 榎並城

1 文和元年（一三五二） 十月九日 園太暦

天晴、今日聞、吉良以下党類、在摂州榎並、近日可攻来山崎之旨風聞、以外騒動、任天運、頗不足憑身歟、

2 応安二年（一二六九）三月二十三日 花營三代記

廿三日。西時。（楠木正儀）同 引退榎並之由申之。赤松大夫判官入道自天王寺同引退云々。

3 天文三年（一五三四）三月十二日 私心記

朝四時、民部少輔御亭（下問？）へ参り、上を人質に取被申候。殿原衆一所にて、晚景榎並まで取のがれ候。種々の儀共、難悉筆も、後又其与力の衆武士等、御亭に御番申候。

4 天文五年（一五三六）五月二十七日 天文日記

榎並四ヶ所へ定専坊并光徳寺為使者差越候。其子細者、榎並之近所路次之事、薬師寺備前守手衆往返の人々相はぎ候間不通候あひだ、四ヶの衆ハ如何候哉申遣候へバ、四ヶ所へ申聞候て返事可申よし申候。

5 天文五年（一五三六）七月二十八日 天文日記

齋之儀廿五日ニしるくもて（善源寺、此、湊上江、放出）此從四ヶ所つとめ候。然而榎並依物念ニ辻、湊上江より兩人計来候。

6 天文十一年（一五四二）三月十八日 私心記

三好方榎並等へ入也。焼也。於飯杜麓ニテ合戦アリ、高屋失理也。

7 天文十三年（一五四四）二月二日、四日 天文日記

二日 ……風呂焼之。又寺内之風呂共毎年雖焼之、今日細川、榎並三好宗三所へ下国之由候間、自昨日相止之間、不及是非也。

三日 細川就榎並三好宗三所へ昨宵下向事、以八尾令音信。高畠甚九郎へ、三種三荷遣之。宗三へ、令音信也。

四日 三好孫二郎（長慶）へ、為年始礼三種五荷遣之榎並へ相越之間、旁遣之 塩田へ、

三種三荷遣之。（秀忠）波多野備前へ、就榎並相越事、三種五荷遣之。

8 天文十三年（一五四四）八月二十六日 天文日記

来廿八日齋頭人（榎並衆）、在所悉洪水相入之間、難調之。

9 天文十七年（一五四八）十月二十八日 細川両家記

同十月廿八日に三好備前守より舍弟十河民部大輔、三好加介、此外人数、十七箇所へ入られける。右衛門大夫は榎並城に籠、日々の取合也。宗三は京田舎上下して調儀なり。然處十河民部大輔、三好加介相談し、宗三と申合られ榎並城へのがれけり。人噉に依也。然共十民は御兄弟の事なれば、後に長慶へ一味也。三好加介はつゐに帰らず、宗三味方して中嶋にて討死也。若氣の至りと諸人申候也。晴元は宗三を御見放し有がたくて、浪人河原林対馬守召出されて榎並城へ加勢也。

10 天文十七年（一五四八）八月十一日 足利季世記 四 片濱合戦の事

同八月十一日ニ池田城衆中ワカレテ宗三方ノ有ケルヲ追出ス。此事アラワレ色ニ出ケレバ、長慶ノ弟十河民部大輔・三好加助・此ノ外人数十七箇所へ入ラレタリ。三好右衛門大夫政勝ハ榎並城ニ籠リテカノ兩人ノ衆ト日々足輕セリ。合止隙ナシ。宗三ハ上下一和シ京田舎衆一味也。十河民部大輔・三好加助モ人ニソソノカサレ、トカク公方モ御屋形モ宗三御一味ナレバ、宗三ト和談アルベキトテ、榎並城へノキ給ウ。然レドモ十河ハ長慶ノ弟ナレバ、頓テ又三好長慶へ帰復シ、三好加助ハ終ニ宗三方ニテ中島ノ合戦ニ討死也。去程ニ細川晴元宗三ヲ見放スコトナリガタクテ、牢人川原林対馬守ヲ召出サレテ榎並城へ加勢ノ為ニツカワサレケレバ、……

11 天文十八年（一五四九）二月十八日 細川両家記

③—1を見よ。

12 天文十八年（一五四九）二月十八日 足利季世記 四 片濱合戦の事

二月十八日三好長慶ハ堺へ打ち越ス。同十九日ニ遊佐河内守長教馳来テ、軍評定アリ。中嶋城榎並城責落トスベキ僉議アリテ引返ス。

13 天文十八年（一五四九）三月一日 細川両家記

（柴島城が落城後…引用者注）同榎並へ河内衆、三好方衆取懸られ共、よき城にて数日を送りけり。

14 天文十八年（一五四九）三月一日 足利季世記 四 片濱合戦の事

（柴島城は…引用者注）即時ニ落城シテ榎並城へ引退ク。三好方城へ入替テ、又河内衆ト長慶衆勝ニノリ榎並城へ押寄せタリ。此ノ城ニハ日頃ヨリ宗三ノ子息右衛門大夫政勝ヲコメ置タリ。究竟ノ要害ニテ落ベキヨウモナカリケル。

15 天文十八年（一五四九）三月十九日 天文日記

就榎並、中島之儀、三好筑前守へ、三種五荷

16 天文十八年（一五四九）六月二十四日 細川両家記

①—1を見よ。

17 天文十八年（一五四九）六月十一日、二十四日 足利季世記 四

①—2、3を見よ。

18 天文二十年（一五五二）十二月二十七日 天文日記

十河民部大夫へ、就榎並田地返付綿五把遣之。

19 天文二十一年（一五五二）九月十三日 天文日記

榎並代官（佐知）梶原三河、しゆ（住路）ん地清兵衛此二人へ、三種二荷ツ、遣之。菅若狭へハ先日樽遣之候し。乍三人代官也。此樽遣之事ハ此方田地有之間、内見之時此方田地之由、百姓申候へ共、榎並居たるをも不知為体之由、申之間、音

信可然之由、自榎並申来候間、如此。

20 天文二十一年（一五五二）十一月十七日 天文日記

榎並買得事、安宅代官以心得、当所務就納取之儀、三代官へ音信事。

21 天正四年（一五六六）四月 陰徳太平記 卷第五十二 摂州森口表并天王寺合戦之事

鐵砲三百放チノ内ニ、浮矢三ツ有ト云フ傳ヘタリ、總シテ大坂ノ出城、中間村、

鳴野、野江、樓ノ岸ナトノ要害共、東西北ノ三方ハ沼澤榮回シテ、一里二里

ガ間ハ往來ノ途ヲ斷テ

22 慶長十九年（一六一四）十二月二日 駿府記

十二月二日、今日遣松平右衛門正久、城周廻令見給、及夜帰参申云、仙波（船場）、天満、備前島、曝布、今市、青屋口、玉造口、榎並等之諸口之体申上通、叶御意云々、

23 享保二〇年（一七三五）日本與地通志畿内部 摂津志

榎並城 在野江村、天文十七年、三好宗三使其子右衛門大夫勝政守馬、十八年宗三戦死、勝政出奔于瓦林城

24 明和七年（一七七〇）諸国廢城考

江波城 三好宗三（名政長、神五郎と称す、宗三は其法号也）此城に居る。天文十八年、細川右京大夫晴元中嶋の城に籠りけるが、三好長慶が為に攻られて三月朔日、此城へぞ引去ぬ。此城はもとより宗三の館なれば、究竟の要害を構へ日本は子息右衛門大夫政勝を籠置たり。去程に長慶は細川二郎氏総を取立、大軍を動して中嶋の城に陣取ければ、六月十一日の早天に当城を立出、晴元の近習外様の大名小名を催し、其勢三千余騎、江口渡越中嶋の城に近づき江口里に打上り、木沢の陣をぞ居ける。到る所に長慶、十河一存等、江口城に推寄、競懸て攻けるが、宗三を本のままにて討れければ、此城に楯籠者

共は城を棄て、方々へぞ落行ける

25 大正一一年（一九二二） 東成郡史

【水神社（村社）】 榎並町大字野江字中の町三百九十三番地に鎮座す。祭神は彌都波能賣神なり。本社創祀年次詳ならず。元来此地方は地盤平低にして淀川或は其支流氾濫の災害を被むること頻繁なるより自ら住民の崇祀する所となりしなるべし。或は伝ふ、天文年間三好宗三が榎並築城と同時に此社を奉祀せしが其後水害終熄せるより若干の神田を寄進せしことありと。然ども未だ其確証を得ず。……

【榎並城址】 大字野江三三六番地（小字渡守）に在り、今遺址存せず。天文十七十月、三好宗三及子政勝、此に墟り、三好長慶に抗す。翌年六月、宗三江口に敗死し、政勝、城を棄てゝ去る。

⑮ 楼の岸砦

1 大永四年（一五二四） 四月十六日 再昌草

渡辺の渡りすとて、楼の岸、大江殿の跡とて松の一木見へたるもあはれにて名に立てるその世のまゝか尋ねばや大江の松の知る人もがな

2 元龜元年（一五七〇） 九月 信長公記 卷三 野田福島御陣の事

九月三日、摂津国中島、細川典厩城まで、公方様御動座。同八日に、大坂十町ばかり西に、ろうの岸と云ふ所、御取手に仰せ付けらる。斎藤新五、稲葉伊予、中川八郎右衛門西三人入れおかる。

3 天正四年（一五七六） 四月十四日 信長公記 卷九 原田備中、御津寺へ
取手討死の事

⑪—2を見よ。

4 天正四年（一五七六） 七月十五日 信長公記 卷九 西国より大船を催し

木津浦の船軍歴々討死の事

⑪—6を見よ。

⑯ 天王寺城

1 正慶二年・元弘三年（一三三三） 楠木合戦注文

此外地頭御家人五十騎、天王寺構城郭、

2 天文十一年（一五四二） 二月二日 私心記

天王寺山中城ヲ焼ヲワリ候也、木澤方ヨリ也、

3 天文十五年（一五四六） 八月 細川両家記

晴元方に山中又三郎、天王寺大塚へ城構て籠けるを河内衆打立て責候、

4 天文十五年（一五四六） 九月 細川両家記

天王寺城噉に成て明渡也、

5 元龜元年（一五七〇） 八月二六日 信長公記 卷三 野田福島御陣の事

信長公は、天王寺に御居陣なり、

6 元龜元年（一五七〇） 九月七日 細川両家記

信長、天王寺より中嶋天満森へ陣替候也、

7 元龜元年（一五七〇） 九月十二日 信長公記 卷三 野田福島御陣の事

根来・雑賀・湯川・紀伊国奥郡衆二万ばかり罷立ち、遠里小野・住吉・天王寺に陣取り候、

8 元龜元年（一五七〇） 九月 陰徳太平記 卷第四十七 信長被攻本願寺

⑬—1を見よ。

9 天正四年（一五七六） 四月十四日 信長公記 卷九 原田備中、御津寺へ
取手討死の事

惟任日向守・永岡兵部大輔兩人は大坂より東南森口・森河内両所に出申付けらる。原田備中は天王寺に要害丈夫に相構へられ、……天王寺取出には佐久間甚九郎・惟任日向守置かせられ、其上御檢使として、猪子兵介・大津伝十郎差遣はされ、則御請け申し、

10 天正四年（一五七六）四月 陰徳太平記 卷第五十二 摂州森口表并天王寺合戦之事

かくて天王寺に向、城を構へ、原田備中守を大将としてこめ置、近辺なれば先づ勝蔓の出城を陥れんとす、

11 天正四年（一五七六）五月三日 信長公記 卷九 原田備中、御津寺へ取手討死の事

（木津より）其儘一揆共天王寺へ取懸け、佐久間甚九郎・惟任日向・猪子兵介・大津伝十郎・江州衆、楯籠り候を取巻き攻め候なり、

12 天正四年（一五七六）五月四日 兼見卿記
於天王寺表大坂衆与及一戦、腹田備中討死、惟日・荒木・三好山城各令籠城、既及難儀云々、

13 天正四年（一五七六）五月七日 信長公記 卷九 御後卷再三御合戦の事

天王寺へ懸け入り御一手に御なり候、……是より大坂四方の塞々に十ヶ所付城仰付けられ、天王寺には佐久間右衛門・甚九郎・進藤山城・松永弾正・松永右衛門佐・水野監物・池田孫次郎・山岡孫太郎・青地千代寿、是等定番として置かせられ、又住吉浜手に要害拵へ、まなべ七五三兵衛・沼野伝内、海上の御警固として入置かせられ、

14 天正四年（一五七六）五月九日 織田信長朱印状 『織田信長文書の研究』六四〇号）

就天王寺取立之城普請、門并家・堀・柱等事、委曲申含峰屋兵庫助差越候、為庄中別而馳走、可為忠節候也、

五月九日
〔信長〕
（朱印）

平野庄中

15 天正四年（一五七六）五月一〇日 正親町天皇綸旨（四天王寺文書）

就今度摂州錯乱、四天王寺伽藍以下悉以廻禄、殊被歎思食者也、早進都鄙之奉加可励再興之志之由、天氣所候也、仍状如件、

天正四年五月十日
左少弁（花押）

執行御房

16 天正四年（一五七六）七月十五日 信長公記 卷九 西国より大船を催し木津浦の船軍歴々討死の事

⑪—6を見よ。

17 天正六年十二月二日 明智光秀書状（御霊神社文書）

……昨日至多紀郡罷越候、爰許之義則時可為存分候、不可有御機遣候、随而天王寺面御在番御苦勞不及是非候、旁期面謁之度候、恐々謹言、

惟任日向守

十二月廿一日
光秀（花押）

奥村源内殿

御返報

18 天正八年（一五八〇）三月十七日 織田信長朱印状（本願寺文書）

覚

一、惣赦免事

一、天王寺北城、先近衛殿人数入替、大坂退城之刻、太子塚をも引取、今度

使衆を可入置事、……

三月十七日

(信長)
(朱印)

(起請文言略)

19 慶長十九年(一六一四) 十一月十八日 当代記

両御所天王寺茶磨山に御登、大坂城遠見し給、付城を有普請、

20 享保二〇年(一七三五) 日本輿地通志畿内部 撰津誌

天王寺城 月江尼寺、乃其墟佐久間信盛等拠焉、迫于光佐石山城、

21 大正十一年(一九二二) 大阪府全志 卷之二

同寺地(月江寺)は其の西北に亘りて謂ゆる天王寺城のありし所なり。寺の前面なる東門外より南西に連れる低窪の地は、當時に於ける濠渠の址なるべし。俗に虫谷と呼ばれて秋虫の名あり。

⑰ 正覺寺城

1 文明十五年(一四八三) 九月十八日 大乘院寺社雜事記

一 昨日河内国マキノ犬田城ノ後ツメ衆与責手ト合戦、後ツメ衆遊佐長直・椎名以下大勢打負了、椎名被打云々、遊佐ハ淀川ノスソ楠葉ノ川ニ落入不見云々、数百人頸共畠山^(義就)右衛門佐方及実檢云々、古市衆井上等高名無是非、少々手負・死人在之、敵方死人不知其数云々、犬田城ハ未落、侍百人計、惣而ハ及三百人計閉籠、於于今者可及生涯云々、御厨子城責落之、今日戸野・寺田宇治辺発向令放火、正覺寺之左衛門督方^(畠山政長)可為迷惑者也、……

2 文明十六年(一四八六) 五月二十七日 多門院日記

同日、河内国誉田辺畠山右衛門佐殿近年相構城郭、与正覺寺之城左衛門守殿^(尊)御対陳之間、……

3—1 明応二年(一四九三) 三月一日 大乘院寺社雜事記

□去月十五日卯刻、大將軍御出陣、至八幡之善法寺給、諸大名奉隨、葉室中納言并松殿中將・高倉兵衛佐以下公家之輩也、同廿四日晴天、至河内国橘嶋正覺寺御出陣、諸大名共奉隨、畠山左衛門督政長陣所也、敵方畠山次郎基家之高屋城、誉田与其間三里也、

3—2 明応二年(一四九三) 二月二十四日 蔭涼軒日録

今日 相公起善法寺御陳替于河州正覺寺、……畠山左衛門督殿被參御陳、以十萬足進上之、諸大名陳所^江亦被出、各以萬足見講礼儀云々、相公今日御著陳于正覺寺一定、八幡與正覺寺交九里有之云々、

4 明応二年(一四九三) 二月二十五日条 蔭涼軒日録

季才明旦可被赴河州正覺寺、仍可伺条々書立、命昌子書之、一諸寺院御祈禱簡進上之事、一御誕生疏御銘事、一公帖御判事、一崇壽院塔主書立御点事、一正使一行可被供 台覽事、五ヶ条也、

5 明応二年(一四九三) 三月五日 蔭涼軒日録

晡前季才自河内御陳帰、件々達之、相公御陳當者、正覺寺内安国寺也、諸寺院祈禱簡供台覽、御誕生疏銘被遊之、公文御判七通被遊之、崇壽塔主天澤和尚御点出、正使一行不及供 台覽、予一行可出之由葉室公有命、

6 明応二年(一四九三) 閏四月二十五日 大乘院寺社雜事記

一辰時正覺寺御陣破了、畠山左衛門督自害、子息尾張守没落、遊佐父子打死、城中死人二十人云々、公方・葉室大納言以下數十人上原手ニ奉取之、御小袖定而可取之歟云々、御小袖奉行一色代吉原、越智手ニ取之、松殿中將古市手ニ取之条無為、在々所々死人・生取有之、不及一合戦而破了、左衛門督不覺也、

7 縣考輯録 藤孝一

一、信長より書を以、河内国之事仰あり、藤孝君兵を發し、畠山か臣遊佐氏

と河州正覚寺に而御合戦有、三好義継・同山城入道、若江・枚方より進て遊佐を援く、……三好方の茨木・三宅・高槻・大坂・若江・金體寺・正覚寺・吹田等各発して、山城入道に後援す、

8 享保二〇年（一七三五）日本與地通志畿内部 卷第三十九 河内国之十三

正覚廃寺 正覚寺村明応中畠山伯姪相開、姪義豐據古市高屋城、將軍義材公率師援伯政長共屯于此細川政元俄叛與義豐共圍正覚寺、政長自殺、政元遂囚將軍於物部家即此今東坊一字猶存

9 大正十一年（一九二二）大阪府全志 卷之四

本地は古来渋川郡に属し、もと賀美郷にして橘莊に属し、正覚寺村と称す。字地に南町・東町・西町・芝町といへるあり。旧郷名は和名抄に「渋川郡賀美郷」と載せ、もと乾村と一村たりしが、明応二年畠山政長の正覚寺に陣せしとき、寺と共に一郷兵燹に罹り、里民は四方に離散せり。然るに乱定後に至り、其の離散せし里民帰り来り、寺地の址に墟りて家屋を造り住せしより此の村名を為し、乾村と分れて両村となれりといふ。

東の坊は字道場にあり、浄土宗知恩院末にして十一面觀世音を本尊とす。旧正覚寺支院六坊の一にして、六坊とは当坊及び柳之坊・池之坊・中之坊・大寺坊・場々坊是れなり。此の六坊を支院とせし成等山正覚寺は、淳和天皇の天長二年弘法大師の開創なり。……明応二年四月畠山政長の其の一族たる畠山義就・同義豐の父子を河州菅田城に伐たんとし、將軍足利義植を奉じて当寺に屯營せしとき、細川政元は義就・義豐に加はりて政長を当寺に襲ひ、政長の運や尽きたりけん防戦利を失ひければ、同月二十八日の夜將軍を窃に筒井城に脱せしめ、最後の酒宴を開き、葉室大納言光忠卿を初めとし、政長

以下二百餘人自殺して火を放ちければ、さしも偉觀を極めし堂塔も悉く灰燼と化し、餘烟は一郷に及びてついに廢寺となれり。後、慶長十二年高野山の祐智阿闍梨、当寺の興廢を歎じて正覚寺の本尊を感得し、七間四面の堂を建立して再興し、寺地は豊臣氏の免租（片桐且元の檢地）たりしが、元和の兵燹に罹りて再び灰燼となり、後草堂を営みて壺寸八分の旧本尊を安置し、天和年間僧實譽之を再建したるもの即ち当坊是れなり。……而して政長の墓は東方字卯塔場にあり、春秋に草を拂ひ香花を供して、其の靈を弔へる里民の情いとやさし。

⑮ 巽城

1 大正十二年（一九二三）中河内郡誌

巽城 長原の北一町許の処に字巽城あり。今は松の並木存するばかりなれども、もと楠公十七城の一なる城塞地なり。其後巽城之助此地に住してより二三十戸の部落を形成明治の中頃迄存せしが遂に長原村へ移住し今日に至れり

2 昭和三十六年（一九六一）東住吉区史

いま区内に残る楠氏の遺跡をあげると、まず長吉長原町の北部、もと字巽城の地は楠公一七城の一である城塞地と伝えられている。しかしこの地にはその後巽城之助が住し、二、三〇戸の部落を形成したが、明治の中期長原部内に移住したといわれる。

⑰ 瓜破城

1 応安四年（一三七二）十一月五日 花宮三代記

河州宇利和利城寄手南方勢引退云々。湯浅一族凶徒百余人被討。

2 永徳二年（一三八二）僧都覺有一跡配分目録（米良文書）

僧都覺有諸弟配分目錄事

……

河類分

河内国ウリワリノ旦那、先達道覺房弟子也、
此ハ侍従公母儀
自手寫得旦那也

……

永徳二年

権大僧都覺有（花押）

⑳ 平野環濠都市

1 文明十四年（一四八二）八月二十七日 大乘院寺社雜事記

官領ハ河内之國中矢尾之西敷平野ニ打入、

2 永祿十二年（一五六九）正月十一日 天王寺屋會記 宗及他會記

堺津中之道具女子共迄、大坂・平野へ落シ申候也、

3 元龜二年（一五七一）正月十二日 多聞院日記

十日十一日、河内ノ平野在所悉焼亡了、僅三十家計殘歟、諸百姓引コミ、群

集悉以果ヘキ也申、不便之次第也、

4 天正十一年（一五八三）九月一日 兼見卿記

一日、庚辰、巳刻發足和泉堺、至平野見物、当在所悉天王寺へ引寄也、竹木

堀以下埋之也、

5 一五八四年一月二十日

一五八四年一月二十日附、長崎發、パードレ・ルイス・フロイスより印度
地方長パードレ・アレッサンドロ・バリニヤニに贈りし書翰

堺の向ふ一レグワ半（六km）の所に甚だ好い町がある。悉く竹を以て囲まれ
城の如くなつてゐて、平野 Firaao と称する。尊師と一緒にキリシタン訪問
の爲め堺より八尾 Yano に行った時通過した、甚だ富んだ人達の村である

が、大坂の商業と繁榮の爲め羽柴は彼等にも移住せんことを求めた。

6 元和五年（一六二九）末吉孫左衛門・平野惣中屋敷売渡証文（佐古文書）

売渡申屋敷之事

合式拾二歩 野堂町ニ在之

本役八升八合也

限四至 東ノ二郎兵衛 南 大道

西 清順 北 あのや

九郎兵衛

右之屋敷、銀子貳百目ニ永代売渡申処明白実正也、但此屋敷者為相国様御詮

平野寺内ニ被 仰付町割被成余屋敷売立、則光源寺御堂御再興之入目ニ御遣

被成候者也、仍如件、

元和五末己年七月六日 平野惣中 ㊟

末吉孫左衛門㊟

のたう

清順老まいる

7 元祿七年（一六九四）末吉文書

由緒書

摂州住吉郡平野庄ハ昔時征夷大將軍坂上田村麻呂利仁公御息大内記広野卿殿
御知行所、則御城郭ニ而四方構二重、二重土手を築廻シ、惣門十三四有之、
遠見矢倉之跡至于今所々御座候、広野卿殿末裔坂上民部殿于今平野庄ニ幽成
住居ニ而御座候、広野卿殿家臣も平野庄住居ニ而、其手筋之者唯今之年寄共
ニ而御座候、後冷泉御宇永承年中、藤氏関白左大臣頼道公御知行所ト成、山
城国宇治平等院寺領被為成寄附、天文年中迄者平等院入ニ而年寄共所務を納、

遂成敗之評議、守護不入之地ニ而御座候、其次河州飯盛山城主三好修理大夫長慶公御下ニ成、松永弾正少弼殿御地頭ニ而御座候、其後織田信長公御蔵入ト成、信長公江者平野庄年寄共御側近ク罷出、御用相勤候付、御年貢等茂纔宛差上候、依之御朱印并御墨印之御懇書數通被成下、其外昔より故有御方樣よりの御朱印御墨印大切成御書數通地下会所土蔵ニ納置候処、大坂乱逆之時被盜取、不知行方候、……

8 十七世紀前半 長井宗左衛門長重覚書

元和貳年辰丙歲三月中比ニ、吉康公被仰候ハ、平野庄町割義 御詮之通ニ可致候、左候ヘハ長井新四郎ニ被仰付候間、町割無相違可仕候、則八尾ノ孫右衛門と申仁、別而御懇ニ被成出入被仕候、年高成仁ニ候ニ付、談合ノためと被仰付候、御意被成候通不殘屋敷割仕、其町々ヘ相渡申候、

②① 喜連環濠集落

1 天文十二年（一五四三）十月十二日 細川両家記

同十月十二日に氏綱、欠郡内喜連杭^{クマタ}全と云處ヘ御出張候へども、泉州横山合戦玉井惣じて引退候間、同十九日に則氏綱も御帰陣也。然ば世上しづか也。

2 永祿九年（一五六六）五月十九日 細川両家記

五月十九日に松永霜台いかなる事やらん、和州多門城を出、摂州中嶋野田と云處ヘ陣取、同廿二日に河内摂津堺喜連と云處ヘ陣取給ふ。さてもいかなる事か出来るぞと思ひ申候所に珍事も無之。

3 享保二〇年（一七三五）日本與地通志畿内部 摂津志

【喜連城】今日平野町。河州高屋属城而畠山三好必争之地天文初年細川氏綱據此。玉井源秀輔之。十二年為畠山所陥退于泉州見宝齋日録。後桃井氏守焉終平井氏又有郡境我孫子城今井兵部者據此。寺岡村船頭村亦各堡址。

4 大正十一年（一九二二）東成郡誌

【喜連城址】現存せる残塁は本村西部々落の周囲にありて、既に其形を失ひたれども、猶高二尺余あり、残壕も処々に存し、大なるは幅二間、深さ数尺に及び、小なる所にては幅数尺、水深を有せざる処もあり。民家の建築物に利用されたるもの多ければ、注意せざれば判明せず。本城は元高屋城の属城にして、畠山三好闘争の地なりき。天文初年、細川氏綱之に據り、玉井源秀之を輔けて、畠山氏に抗せしが、同十二年畠山氏の為に陥れられ、泉州に退きぬ。後桃井氏之に據り、平井氏に及びたりしが、平井氏滅びて城廢せり。

②② 桑津環濠

1 応神天皇十三年（三七九）三月 日本書紀

十三年春三月、天皇遣専使、以徴髮長媛。秋九月中、髮長媛至自日向。便安置於桑津邑。

2 大正十一年（一九二二）東成郡誌

【天神社（村社）】大字桑津に鎮座す。祭神は少那彦名命なり。……大阪陣の時兵燹に罹り、旧記を失ひ由緒詳細ならず。……八幡宮は元金蓮寺境内に在りしを、明治維新後、神佛分離の際、此に移す。

【光津寺】大字桑津五九七番地に在り。真宗本派本願寺末に属す、安井山と号す。慶長八年創建にして、開基は僧玄祐なり。

【光琳寺】大字桑津五八一番地に在り。真宗佛光寺派に属す、歓喜山と号す。応永年間の創建にして、開基は僧觀明なり。

【見性寺】大字桑津六七四番地に在り。浄土宗鎮西派知恩院末に属す。無生山施薬院と号す。天平八年勅願によりて伽藍を建立し、行基を以て開基とす。其後何時代にか廢頽したりしを、明暦三年、二世阿念再興し、延宝八年、三

世恵秀再建す。明治十四年頃、火災に罹りて建物及宝物全く焼失せり。……今の堂宇は金蓮寺のものたりしなり。

【金蓮寺（廃）】其址大字桑津五八六番地に在り、浄土宗なれども無本寺なり。境内に八幡宮ありき。その本地堂と称す。……無住の爲め明治六年廃寺となり。本堂は見性寺に移せり。……伝へ云ふ、この宮址は髭長姫旧棲の址にて、後人宮を立てゝ八幡宮と崇めたりと。

桑津今川堤 平野郷の西平野川に従ふて行けば長堤あり。櫛樹を植ゆ。之を今川堤といふ。昔は奈良街道に当り、輿影馬声、日夜往来して絶ゆる間なく、名物桑津新鮓は行く人の疲を慰めたりき。……爾来変遷して奈良街道も他に更められ、櫛樹は枯死するに任せて今や昔の面影を存せず。

②③ 堀環濠集落・前堀環濠集落

1 天文六年（一五三七）四月三〇日 方便法身像裏書（木本勝太郎氏所蔵文書）
本願寺釈証如（花押）……

永光寺門徒撰州住吉郡堀村 願主釈成法

2 天正三年（一五七五）四月 信長公記 卷八 河内国新堀城攻め干され並びに誉田城破却の事

四月十六日、遠里小野へ、信長御陣取り、近辺の耕作、信長御自身難させられ、堺の近所に新堀と申す出城拵へ、十河因幡守、香西越後、大将として楯籠る。四月十七日、御馬寄せられ、取巻き攻めらる。

四月十九日、夜に入り、諸手諸合ひ、火矢を射ち入れ、填草を入れ、攻めさせられ、大手・搦手へ切つて出ず。然而、香西越後生捕に罷りなり、縄懸かり、眼をすがめ、口をゆがめ、御前へ参り候。夜中には候へども、香西と御見知り候て、日比届かざる働き仰せ聞かせられ、誅させられ候。

討ち取る頸の注文、香西越後、十河因幡、十河越中、十河左馬允、三木五郎大夫、藤岡五郎兵衛、東村大和、東村備後。

3 天正三年（一五七五）四月 織田軍記 卷十四 信長公南方進発所々御働の事

同月十六日遠里小野ニ御本陣御自身御下知ニテ、近辺ノ耕作難捨サセラル。堺ノ近所ニ新堀ト云取手ノ城アリ。三好方の香西越後十河因幡両將トシ多勢籠リ居ケル所へ、同月十七日信長公御馬被寄、諸勢キビシク取マキ、攻ル事三日三夜、同月十九日ノ夜諸手ヨリ揉合セ、火矢ヲ放シ、埋草入レテ責詰ルニ、城兵堪ヘガタク、追手搦手ヘ悉ク打出、各討滅シ、終ニ落城ス。討取處ノ頸ノ姓名香西越後守、十河因幡守、同越中守、同左馬允、三木五郎大夫、藤岡五郎兵衛、東村大和守、同備後守等、此外究竟ノ侍百七拾余討トラレス。就中香西越後守ハ生捕ト成テ出ケルニ、縄ニ掛リナカラ熊口ヲユガメ、眼ヲスガメテ、御前へ引出サレテモ見シラレマジキトスルヲ、信長公夜中ナレドモ香西ト御見シリ有テ、只今マデ幾度モ敵トナリ味方トナリシ不届ノ条々被仰聞、忽ニ誅セララル。

4 宝暦七年（一七五七）全堺詳志 上

禅楽寺大心（紫野古溪派僧天倫ノ法嗣）著す所、海船地名政所の記に曰、永正元年二月十八日、三好長輝、一大宅を泉州海船の浜において起さんと欲し、京師より界浦に来る。是歳四月八日、土木之役を始む。其の封疆、東西三百六十歩、南北之を倍す。中間高く楼を構えて、以て遥方眺望に備え、且は非常戍衛に備う。楼中鐘鼓陣具等の兵器を貯う。恒に楼上より非常を窺う。親戚名士を令せしめ、月を限りて輪直せしむ。軍用の設、一も欠け無し。長輝常に京に在りて自ら政を執り、此の地の四国運送に宜しきを以て、之を本

館と為し摂の尼崎城、泉の新堀（アラホリ）城、岸和田の城、河の小山古市の諸城を以て諸將の居所と為す。

5 大正十一年（一九二二） 東成郡誌

大字堀は本村（長居村…引用者注）の東部を占め……大字名は昔時の城址にして、部落の周囲に濠を回らすに因る。小字梅檀城・大門・鉄砲島は古城に因めるなり。鉢塚は古鉢を埋めし所なりと伝ふ。

大字前堀は大字堀の南に接し、……居宅地の前に濠ありしより前堀と称す。

【保利神社（村社）】大字堀字堀無番地に鎮座す。祭神は素戔鳴尊なり。本社は往昔戦国時代に周防守某（姓名不詳）此地に築きて居城とし、其一門一族の守護神として始めて崇祀したるなりと伝ふ。其年代は詳ならざるも、境内の樹木等より推考すれば凡六七百年以前なるべし。

【瀧光寺】大字堀小字堀小字堀七十三番地にあり。真宗本派に属し山号佛勇山と称す。本尊は阿弥陀如来。其開基創建不詳。寛文十年僧誠諦これを再興す。

【古城址】大字堀は古城址なりと伝ふ。堀部落を圍繞する幅数十尺、深さ数尺なる堀存し、又小字に大門、大手の樋、鉄砲島、梅檀城などの名あり。梅檀城は古城名なりといふ。城主は周防守某と称し、戦国時代の築城なりと伝れども、その姓名及確なる年代等詳ならず。

6 大正十一年（一九二二） 大阪府全志 卷之三

里伝に依れば、往時城のありし所にして、濠地は在城常時に掘られしものなりと伝う。依て思うに左に掲記せる物見記に、堺の近辺なる新堀と見ゆるは本地にして、本地は取手の城のありし所ならんか。

②④ 寺岡環濠集落

1 大正十一年（一九二二） 東成郡誌

大字寺岡は本村の西部を占め、東は大字堀、並に依羅村に接し、西は住吉村、南は墨江村、北は田辺町に境す。形状長方形を為し、東西に短く、南北に長し。東西約七町、南北約十九町あり。名称の由来は寺岡住宅地のやや東に当りて一帯に丘岡を為す、ここに寺院のありしなるべし。

【神須牟地神社（村社）】大字寺岡字東之町無番地に鎮座す。祭神は神産靈神、手力王命、天兒屋根命なり。式内の神社なり、明治以前は三つ宮と称せり。社地一帯の地形は往古は三島となり、南島に神須牟地の神鎮座し、中島に五大力菩薩、北島に辨才天を祀れり。細江の流はこの三島を廻りしが、今は河の流域変して島の形を止めず。鎮座の年代は詳ならず。慶長の兵火に罹りしを、元和四年八月、宮座多賀谷頼負等再建す。

真光寺 大字寺岡東の町百九十四番地に在り。真宗本願寺派末にて山号を辻本山と称す。本尊阿弥陀如来。明応五年、当地の人僧宗斎の創建にかかる。

西方寺 大字寺岡西の町無番地に在り。宗派は真宗京都本願寺派末にして山号を清涼山と称す……文禄元年本願寺第十一世光佐法主直弟明誓、信徒七百人と協議の上建立す

2 昭和五十六年（一九八一） 日本城郭大系 第十二卷

寺岡の地は、まわりよりも少し土地が高く、道は狭く曲りくねっている。昭和二十年の空襲をまぬかれたためか、古い家並がまだ残っている。西長居町七〇五の真光寺（真宗大谷派）のあたりが旧字「寺岡」の中心部に近いが、その境内には良水の汲めたという井戸があり、今でも水は湧いている。

この旧寺岡村は、近世の環濠集落の遺跡の一つとして知られるのみでなく、もっと歴史は古い。戦国時代、畠山・三好・細川・桃井各氏らの抗争が続く中で、寺岡付近でもたびたび合戦が行われ、その戦場となった。その頃から

防禦用の堀を掘ったのかもしれないが不明である。ただ、喜連・我孫子・船堂ならびに寺岡の四ヶ所をかつて「元の城」と呼んでいたといい、「一の木戸」「櫓の下」「鉄砲足」などの地名が今も残っている。大坂夏の陣（一六一五）ののち、大坂城の多くの浪人が寺岡に集まり、土民となったという伝承もある。

②⑤ 我孫子環濠集落

1 嘉慶二年（一三八八）三月五日 山名氏清奉行入連署奉書（離宮八幡宮文書）

撰津国我孫子住人法師太郎・同国山内住人四郎太郎并喜連内四郎男、号住吉社御油神人、立置油木、致往胡麻油等之新儀交易云々

2 宝徳三年（一四五二）正月十一日 河内国鑄物師座法（真継文書）

為寄会之人数定置座法之事

合京都へ進上申候御役銭之事

一 御即位之御礼銭之事

一 御奉行御倉殿御代替之御礼銭之事

一 山城立之公役銭之事

已上三ヶ條

右之前、任先例之旨、無不沙汰釜屋在之間、馳走可申候也、其上為百九人定置所、若又其末々破申二をきてハ、從京都可被加御成敗候、為座中も可致成敗候、仍為後日之状如件

宝徳三年正月十一日 「河内国鑄物師^{異筆}長中」

かつた村十七人代国次（花押）
^{（刈田）}

あひこ村廿一人代宗次（花押）
^{（我孫子）}

東堀村六人代長家（花押）

新在家村十人代家次（花押）

西堀村廿一人代久吉（花押）

内かいと村廿三人代家清（花押）

にわい村七人代国清（花押）
^{（庭井）}

大豆塚四人代久清（花押）

3 享祿五年（一五三二）閏五月十三日 細川両家記

同五年壬辰閏五月十三日に阿波衆境より出張也。典^{細川}、香川、中務丞、築嶋に陣取給ふ。三好筑前守元長衆は住吉の澤の口遠里小野に陣取給ふ。久米、河村、東條、七條、一宮、三好山城守等は吾孫子・苅田に陣取。

4 十六世紀後半 今井宗久書札留（今井文書）

態令申候、仍其村吹屋在之由候、往古筋目を以、如先々我孫子五ヶ庄へ可召直之旨、上儀候条、被得其意、急度馳走肝要候、恐々

二月十七日

湊村惣中

5 享保二〇年（一七三五）日本與地通志畿内部 撰津志

②①—3を見よ。

6 大正一一年（一九二二）東成郡史

【我孫子城址】 大字我孫子字城ノ内其址なるべし。

②⑥ 遠里小野環濠集落

1 貞和二年（一二四六）十二月二十六日 太平記 卷二十五 山名時氏住吉合戦の事

大手の大将山名伊豆守時氏、千余騎にて住吉に陣をとれば、搦手の大将細川陸奥守頼氏、八百余騎にて天王寺に陣を取。楠帯刀正行是を聞て、……同二十六日曉天に五百余騎を率し、先住吉の敵を追出さんと、石津の在家に火

を懸て、瓜生野の北より推寄たり。

2 延文四年（一二五九） 太平記卷三十四 新將軍義詮朝臣南方進発の事

さる間大手搦手三十万余騎、同日に河より南へ打越、天王寺・安倍野、住吉の遠里小野に陣を取。

3 応永四年（一三九七） 五月二六日 室町幕府管領署判下知状（離宮八幡宮文書）

摂州道祖小路、天王寺、木村、住吉、遠里小野并江州小秋散在土民等、恣令売買荏胡麻云々、向後可被破却彼油器之由、所被仰下也

4 享祿五年（一五三二） 閏五月十三日 細川両家記

②⑤—3を見よ。

5 天文二六年（一五四七） 七月二六日 細川両家記

同七月廿六日に十七ヶ所の諸勢住吉遠里小野澤の口へ陣替有。四国衆と談合と申なり。

6 永祿九年（一五六六） 二月十一日 細川両家記

永祿九年丙寅二月十一日に畠山高政、泉州国衆、根来寺衆被相談候て、多門城と一味して其勢七千餘騎、境南北遠里小野迄被陣取由に候。

7 元龜元年（一五七〇） 九月十二日 信長公記 卷三 野田福島御陣の事

①⑥—7を見よ。

8 天正三年（一五七五） 四月 信長公記 卷八 河内国新堀城攻め干され並びに誉田城破却の事

②③—2を見よ。

共同研究成果報告書 17

大阪市の中世城館

令和 7 年 3 月 31 日発行

編集・発行 大阪歴史博物館

〒 540-0008 大阪府中央区大手前 4 丁目 1-32

印刷 株式会社 因州屋